

壬辰倭乱(文禄・慶長の役)研究の現況と課題

朴哲暎

1. 序論
2. 壬辰倭乱研究の時代別傾向
 - 1) 日帝時代
 - 2) 1950-60年代
 - 3) 1970年代
 - 4) 1980-90年代
3. 細部主題別研究現況
 - 1) 壬辰倭乱に対する視点
 - 2) 原因
 - 3) 展開過程
 - 4) 軍事制度・軍事動員体制・作戦指導
 - 5) 軍事施設・装備・武器
 - 6) その他(降倭、被擄人、民衆の生活相など)
4. 壬辰倭乱に対する新たな視角形成のための提言

1. 序論

壬辰倭乱は16世紀末、東北アジアで起った国際戦争であり、戦後国際秩序を変化させた大事件であった。鳥銃で武装した15万余¹の日本軍の奇襲攻撃で始まり、朝鮮はソウルが陥落し、平安・咸鏡道までも蹂躪されるといふ絶体絶命の危機に直面した。しかし、その後戦列を整えた朝鮮の官軍と各地で起った義兵・僧軍の活躍、水軍の海上権掌握、明の援軍との合同反撃作戦によって戦況は逆転した。

東アジア三カ国が行ったこの戦争で、朝鮮側は王朝はそのまま存続したが莫大な被害を被った。日本側は政権が交替し、明もまた新たに清と交替することとなった。結局、壬辰倭乱は当時東アジア三カ国の政治構造を揺るがす結果をもたらしたのである。

¹ 壬辰倭乱当時の日本軍の数に関しては、陸軍正規兵が約157,800人、水軍は8,000名で、正規の戦闘部隊以外にも多くの兵力が出征し、全体の兵力は約20万名であった。(李章熙ほか、1995「朝鮮中期の外侵とその対応」『韓国史』29、国史編纂委員会、ソウル) 現在、韓国側の研究者の大部分は具体的な分析もすることなく、部隊編成の基準に合わせてこれに従っている。

また、壬辰倭乱は、韓・日間で歴史認識の違いによって対立している代表的な例の一つである。従来、日本では侵略主義の風潮に合わせてこの戦争を国威宣揚した快挙、または日本の膨張主義の実例と評価した。一方、韓国ではこれを日本人の武力挑発、もしくは侵略と評価した。一部では壬辰倭乱の緒戦以降の反撃と撃退を誇張して、朝鮮側が敗北したのではないと主張するむきもあった。

従って、韓日両国の善隣友好の次元で壬辰倭乱を見る視角をどうしたら望ましいかを話し合うことは韓日歴史共同研究委員会の重要な事案といえる。しかし、この戦争について性急に性格を規定するよりも、当時の様々な社会状況や歴史的条件と結びつけて多様な解釈を目指そうとする歴史的省察が必要であり、東アジア三国が行った国際戦争という側面から眺める巨視的な観点が要求される。

本稿では、韓国での既存の研究史を時代的傾向とともに細部的な主題別の研究史を整理して、今後の壬辰倭乱研究の望ましい方向を提示しようとする。これまで壬辰倭乱に対する研究史整理は李章熙をはじめとする何人かの研究者たちによって行われてきた²。本稿はその研究史をもとに追加・補完して、今後新たに研究すべき部分や展望について論じたい。

2. 壬辰倭乱研究の時代別傾向

1) 日帝時代

日帝時代の壬辰倭乱研究はほとんど全てが日本人学者による研究成果で、主に日本軍の活躍と戦略・戦術的成功に焦点を合わせたものである。これらの研究は既に1894年から現れ始め、主に征韓論的歴史認識をもとに研究が始まったが³、日本の膨張主義を浮き彫りにする植民史観的観点からなされたものといえる。

一方、韓国人研究者が壬辰倭乱を扱った研究もいくつか見られるが、学問的研究成果と見るには多少及ばない点がある。これは、日帝による植民地的状況において民族問題が尖鋭に関連せざるをえない壬辰倭乱史を研究するのは現実的に不可能であったためである。

それにもかかわらずいくつか注目すべき点がある。それは、申采浩の『水軍第一偉人李舜臣伝』⁴と崔南善の『壬辰乱』⁵、姜敷錫の『東国戦乱史』⁶などである。『水軍第一偉人李舜臣伝』で申

² 国内の研究史整理としては、次のようなものがある。

李章熙、1975「壬辰倭乱」『韓国史論』4、国史編纂委員会、ソウル

李章熙、1987「倭乱と胡乱」『韓国史研究入門』第二編、知識産業社、ソウル

河宇鳳、1995「事大交隣関係と両乱」『韓国歴史入門』2、韓国歴史研究会、ソウル

金文子、1999「壬辰倭乱に対する日本の視角変遷」『歴史批評』46、歴史批評社、ソウル

呉宗録、1999「壬辰倭乱—丙子胡乱期の軍事史研究の現況と課題」『軍史』38、国防軍史研究所、ソウル

趙浚来、2000「壬辰倭乱史研究の推移と課題」『朝鮮後期史研究の現況と課題』創作と批評社、ソウル

³ 北豊山人、1894「文祿慶長朝鮮役」(附 朝鮮全図)

⁴ 申采浩、1908『水軍第一偉人 李舜臣傳』独立運動史研究所、1989『独立運動史教養叢書11—乙支文徳・李舜臣伝・崔都統傳』独立記念館に収録

⁵ 崔南善、1931「壬辰乱」、東明社

采浩は、李舜臣を‘水軍第一偉人’と評価し、韓民族もこうした歴史上の英雄を見習って勇敢に国権回復運動を展開するなら日帝の侵略から国権を回復できると期待した。また、崔南善の『壬辰乱』と姜敷錫の『東国戦乱史』でも、韓民族にとって最大の戦乱である壬辰倭乱をはじめとする主要な戦乱について詳細に整理されており、国乱克服史を通じた民族意識の鼓舞に焦点が当てられている。従って、日帝によって国権が簞奪された危機のもとで、民族意識を鼓舞して究極的には国権を回復するという民族主義史学の歴史認識が底流にあることがわかる。

2) 1950-60年代

壬辰倭乱研究は植民地支配から脱した後もしばらくの間これといった進展が見られなかったが、1960年代に入って日帝の植民主義歴史学を克服するための民族主義的雰囲気次第に強まっていくなかで徐々に本格化していった。

この時期の壬辰倭乱研究最初の成果は韓祐功によって行われた⁷。韓祐功は「壬辰乱の原因に関する検討」で、豊臣秀吉が戦争を始めた動機について日本の国内情勢と結びつけて検討し、壬辰倭乱に対する研究者の関心と呼び覚ましたという点で意味がある。以来、壬辰倭乱に関する研究が本格化した。初期の研究において先駆的な役割を果たしたのは崔永禧である。崔永禧は1957年に、朝鮮朝廷の失政と戦争の勃発で最も大きな被害を受けた海岸地域住民の動態を考察したの⁸に続いて、亀甲船、義兵研究などに力を傾け壬辰倭乱に関連する軍事史研究の視野を広げたが、以降も壬辰倭乱を正しく理解するために努めている⁸。

1960年代に入り壬辰倭乱研究は新たな転機を迎えた。朝鮮中期の軍役の崩壊様相や訓練都監設置に関する研究⁹、本格的な戦争史の側面からの壬辰倭乱を分析した研究¹⁰、水軍と李舜臣の活動を整理した研究¹¹が発表された。また、この他にもソウルの防衛や修復¹²、火薬武器の発達

⁶ 姜敷錫『東国戦乱史』(成百暎・柳在浩訳、1988『東国戦乱史(外乱)』)、国防部戦史編纂委員会、ソウル

⁷ 韓祐功、1952「壬辰乱の原因に関する検討—豊臣秀吉の戦争挑発原因について」『歴史学報』、歴史学会、ソウル

⁸ 崔永禧、1957「壬辰・丁酉乱時の沿海民の動態」『史叢』2、高麗大史学会、ソウル

崔永禧、1958「亀船考」『史叢』3、高麗大史学会、ソウル

崔永禧、1960「壬辰義兵の性格」『史学研究』8、韓国史学会、ソウル

崔永禧、1964「壬辰倭乱中の対明事大について」『史学研究』18、韓国史学会、ソウル

崔永禧、1981「壬辰義兵の性格」『軍史』2、国防部戦史編纂委員会、ソウル

崔永禧、1985「壬辰倭乱中の民衆と義兵」『東洋学』15、檀国大東洋学研究所、ソウル

崔永禧、1990「壬辰倭乱期の湖南義兵の特性」『求禮石柱閣七義士』求禮郡・木浦大博物館

崔永禧、1991「壬辰倭乱前の湖南地方の社会動態」『壬辰倭乱と全南』全羅南道

崔永禧、1991「壬辰倭乱の再照明」『国史館論叢』30、国史編纂委員会、果川

崔永禧、1992「壬辰倭乱の最初の戦闘について」『水邨朴永錫教授華甲記念韓国史学論叢』(上)

崔永禧、1992「壬辰倭乱に関する理解の問題点」『韓国史論』22、国史編纂委員会、果川

崔永禧、1992「壬辰倭乱研究のための提言」『アジア文化』8、翰林大アジア文化研究所、春川

⁹ 車文燮、1961「壬辰以降の良役と均役法の成立」(上・下)『史学研究』10・11、韓国史学会、1996『朝鮮時代の軍事関係研究』、檀国大出版部に再収録

¹⁰ 李炯錫、1967『壬辰倭乱史』上・下、壬辰戦乱史刊行委員会

¹¹ 趙仁福、1964『李舜臣戦史研究』鳴洋社

崔碩男、1964『韓国水軍活動史』鳴洋社

¹² 金龍国、1962「壬辰倭乱中のソウル修復と防衛計画」『郷土ソウル』22、ソウル市編纂委員会、ソウル

李鉉淙、1963「壬辰倭乱とソウル」『郷土ソウル』18、ソウル市史編纂委員会、ソウル

相¹³、対外関係¹⁴、壬辰倭乱の被害相と社会動態¹⁵、戦乱中の外交的側面¹⁶や経済的側面の分析¹⁷、日本に連れて行かれた朝鮮被虜人¹⁸、戦乱による日本への文化的影響¹⁹、日本側史料に表われた壬辰倭乱分析²⁰など多様な分野での研究が行われた。その中でも義兵や僧軍の活躍については崔永禧をはじめとする研究者によって多くの成果が現れた。特に、義兵と僧軍、社会動態など壬辰倭乱に関連する諸側面を考察した李章熙²¹の研究が注目される。

この時期の研究成果として注目すべきものの一つは李炯錫の『壬辰戦乱史』である。これは歴史叙述方法や体制において学術書として限界があり多少の問題がないわけではないが、その当時においては壬辰倭乱に関する最も膨大な分量の戦争史書である。特に、国内外の膨大な文献資料を収集・引用して、壬辰倭乱の7年戦争を編年体中心の戦闘史として編集した点が特徴である。

この時期までの全般的な研究成果の特徴は多くの研究が李舜臣に焦点を当てている点である²²。研究全体に占める李舜臣関連研究は3分の1に達するほどでその比重は大きい。これはおそらく日本の植民地支配に対する雪辱を李舜臣に求めた結果と考えられる。

一方、北韓と日本でも壬辰倭乱に対する研究が活発に行われた。北韓ではやはり民族主義的観点が強く反映された研究が多かった²³。また、日本では過去の帝国主義時代の観点から離れて、義兵や朝鮮民衆の反乱など朝鮮内部の社会動態、戦争の原因、戦争以降の東アジア国際秩序の変動など多様な観点から研究が進んだ。これは日本の新しい東アジア国際秩序構築の意志と関連しており注目を要する部分といえる。

¹³ 許善道、1966「李朝中期の火器の発達(上・下)」『歴史学報』30・31、歴史学会、『朝鮮時代火薬兵器史研究』一潮閣に再収録

¹⁴ 金良善、1964「壬辰倭乱従軍神父セスペデスの来韓活動とその影響」『史学研究』18、韓国史学会、ソウル

¹⁵ 李崇寧、1962「壬辰倭乱と民間人の被害について」『歴史学報』17・18合併号、歴史学会、ソウル

李章熙、1968「壬辰乱中の民間叛乱考」高麗大学修士論文

李章熙、1968「壬辰乱中の民間叛乱について」『郷土ソウル』32、ソウル市編纂委員会、ソウル、1999『壬辰倭乱史研究』一潮閣に再収録

¹⁶ 崔永禧、1964「壬辰倭乱中の対明事大について」『史学研究』18、韓国史学会、ソウル

¹⁷ 李ヨソレ、1967「壬辰倭乱の経済史的意義」『経商論集』3、建国大経商学会、ソウル

¹⁸ 金龍基、1969「壬辰倭乱の被虜人刷還関係—新資料海東記考」『大邱史学』1、大邱史学会、大邱

¹⁹ 金泰俊、1958『壬辰乱と朝鮮文化の東漸』、韓国研究叢書33集、韓国研究院

韓ビョンシク、1962「韓日文化故事—文禄慶長の役と日本文化」『漢陽』1—9

²⁰ 丁仲煥、1963「日本の記録に見る壬辰乱」『港都釜山』3、釜山市史編纂委員会、釜山

²¹ 李章熙、1969「壬辰海西義兵に関する一考察—延安大捷を中心に—」『史叢』14、高麗大史学会、ソウル

李章熙、1969「壬辰倭乱僧軍考」『李弘稷博士華甲紀念韓国史論叢』、刊行委員会、ソウル

²² 金龍国、1964『韓国海軍史』海軍本部

趙仁福、1964『李舜臣戦史研究』、鳴洋社、ソウル

崔碩男、1964『韓国水軍史研究』、鳴洋社、ソウル

²³ 北朝鮮学会の壬辰倭乱研究成果として主要な内容を見ると、次の通り。

ヤン・ヒョンソプ、1957『1592—1598 壬辰祖国戦争における人民義兵闘争』社会科学院歴史研究所 古代・中世史研究室、1958「壬辰祖国戦争と朝鮮人民の愛国闘争」『歴史科学』1958—6

尹錫源、1963『郭再祐指揮下の嶺南人民の闘争』、朝鮮労働党出版社

尹錫源、1963『壬辰祖国戦争』、朝鮮労働党出版社

チェ・キルソン、1964『壬辰祖国戦争期の我が水軍の闘争』、社会科学出版社

3) 1970年代

1970年代に入ると、壬辰倭乱史研究は朝鮮時代の軍事史分野に関する学問的理解の上に新たな発展の転機を迎えた。1968年に壬辰倭乱までの朝鮮前期の軍制全般と国防体制の変化の様相、烽燧制・駅站制・武器の発達、軍事服飾制度などを整理した『韓国軍制史』²⁴が発刊された。こうした研究成果を基に1960年代末—1970年代初めに壬辰倭乱の軍事的側面だけでなく、外交・文化・社会的側面から注目すべき多様な研究が活発に行われた²⁵。

代表的な研究を紹介すると崔永禧の『壬辰倭乱中の社会動態』を挙げることができる²⁶。崔永禧は壬辰倭乱研究の先駆的役割を果たし、さらに壬辰倭乱時の義兵の性格究明を中心テーマと設定して、壬辰倭乱初期から無政府状態に陥った社会状況の中での民衆の動向や義兵の変化相を考察した。

この他にも壬辰倭乱期の軍糧調達の実態を把握した李章熙の研究²⁷、壬辰倭乱を対外関係史の観点から考察した李鉉淙の研究²⁸、そして壬辰倭乱勃発後に新設された中央軍営を通じた中央軍制の変化の様相を詳細に分析した車文燮の研究²⁹、壬辰倭乱研究の新しい視点を提示して

²⁴ 陸軍本部編、1963『韓国軍制史』、陸軍本部、ソウル

²⁵ 金聖泰、1970「李舜臣將軍の性格研究」『行動科学研究』1、高麗大行動科学研究所、ソウル

金日基、1970「閑山大捷とその影響」『論文集』2、三陟農業専門学校

丁仲煥「壬辰倭乱と釜山史」『朴元杓先生回甲記念釜山史研究論叢』、刊行委員会、釜山

崔權黙、1970「壬辰時の湖西義兵について」『論文集』9、人文社会科学編、忠南大、大田

金潤坤、1971「壬辰乱勃発直前の地方郡県の実態」『柳洪烈博士華甲紀念論叢』ソウル

李章熙、1971「壬辰中の投降倭兵について」『韓国史研究』6、韓国史研究会、ソウル

李章熙、1971「壬辰中の糧餉考—明兵の軍糧調達を中心に—」『史叢』15・16合併号、高麗大史学会、ソウル

金錫禧、1972「壬辰乱の義兵に関する再考察」『論文集』13、釜山大、釜山

宋正炫、1972「壬辰倭乱と湖南義兵」『歴史学研究』4、全南大史学会、光州

金義煥、1972『人間李舜臣伝』、ヨンムン出版社

李章熙、1972「壬辰前の西北境界政策」『白山学報』12、白山学会、ソウル

崔書勉、1973「壬辰倭乱の人質—‘織田じゅりあ’に関する史的考察—」『民族文化論叢(鷲山李殷相博士古希紀念文化論叢)』、刊行委員会、ソウル

許善道、1973・74「制勝方略研究(上・下)—壬辰倭乱直前の防衛体制の実状—」『震檀学報』36・37、震檀学会、ソウル

李炯錫、1974『壬辰戦乱史』(上・中・下)、壬辰戦乱史刊行委員会

崔永禧、1974『壬辰倭乱』、世宗大王記念事業会、ソウル

崔權黙、1974「壬辰倭乱時の湖西地方の民間叛乱」『百濟研究』5、忠南大百濟研究所、大田

金鍾旭、1974「壬辰時の被虜人刷還」『日本研究』

金鍾旭、1974「壬辰後の朝鮮と日本の国交回復」『日本研究』

李殷相、1974『忠武公の生涯と思想』(三星文化文庫63)、三星文化財団

李鉉淙、1974「壬辰倭乱時の琉球・東南亜人の来援」『日本学報』2、韓国日本学会、ソウル

崔永禧、1975『壬辰倭乱中の社会動態—義兵を中心に—』、韓国研究院、ソウル

金泰俊、1975「日本の新儒学成立と朝鮮学者—壬辰前後の朝鮮文化の対日影響を中心に—」『明大論文集』8、明知大、ソウル

權重憲、1976「壬辰倭乱を中心とした三国(韓・中・日)の外交関係」『院鳳』3、慶熙大大学院、ソウル

金泰俊、1976「鶴峰金誠一の日本日録」『明知語文学』8、明知大、ソウル

李慶姫、1979「壬辰倭乱で捕虜となった陶工の行方」『論文集』1、大邱工専、大邱

²⁶ 崔永禧、1975前掲書

²⁷ 李章熙、1971「壬辰中の糧餉考—明兵の軍糧調達を中心に—」『史叢』15・16合併号、高麗大史学会、ソウル

²⁸ 李鉉淙、1974「壬辰倭乱時の琉球・東南亜人の来援」『日本学報』29、日本学会、ソウル

²⁹ 車文燮、1970「宣祖朝の訓練都監」『史学志』4、檀国大史学会、ソウル

国防体制の変遷過程と防衛体制の実状を考察した許善道の研究³⁰なども注目される。

この時期におけるこうした一連の研究成果は国史編纂委員会の『韓国史』に整理された。この中で壬辰倭乱史が記述された部分は第12巻(『両班社会の矛盾と対外抗争』)の中の一つの節で、「日本の侵攻」という題目の下に‘日本の侵略戦争準備’、‘倭軍の侵攻’、‘宣祖の西遷’、‘義兵の蜂起’、‘水軍の勝利’、‘反撃戦と講和会談’、‘丁酉再乱’、‘倭乱の影響’の順序で記述されている。

4) 1980—1990年代

1980年代以降の壬辰倭乱研究はさらに活発となったが、特に、壬辰倭乱を朝鮮が敗れた戦争と見ていた従来の認識に対する反省が強く提起された³¹。これは既存の日本人官学者の植民史観的観点から研究された結果の影響を受けて、壬辰倭乱を敗北した戦争と認識してきたことに対する反論であった。また、既存研究において露呈した殉国史観や英雄史観を止揚し、戦争史の立場での軍制・軍需・武器・戦術・関防・情報などの各分野についての客観的研究を通じて壬辰倭乱を新たに理解しなければならないという自省論も提起された。こうした問題提起は壬辰倭乱の戦争史的理解のレベルアップに寄与した。

しかし、こうした問題意識から出発した壬辰倭乱研究はまた別の問題を抱えていた。戦争はその属性上軍事行動を通じて政治的目的を貫徹しようとするものであるため、勝敗に対する解答は明らかであっても、単純に勝敗にのみ執着したために大規模な国際戦争が朝鮮の領土内で展開して朝鮮が決定的な被害を受けたという側面が相対的に軽視されるという観が強かった。従って、壬辰倭乱が朝鮮史の発展にどのような影響を及ぼしたのかについてもっと冷静な判断が要求されている。

以降、壬辰倭乱研究は壬辰倭乱勃発400周年となる1992年を基点にさらに多様な展開を見せた³²。また、壬辰倭乱を主題とする専門研究者も次第に増加し、壬辰倭乱に関連する主題で博士学位論文も相次いで提出された³³。これは壬辰倭乱研究の幅と質の向上に寄与したと考える。

³⁰ 許善道、1973「『鎮管体制復旧論』研究—柳成龍の軍制改革の基本施策」『国民大学論文集』1、
許善道、1973・74「制勝方略研究—壬辰倭乱直前の防衛体制の実状—」(上・下)『震檀学報』36・37、震檀学会、ソウル

³¹ 許善道、1985「壬辰倭乱論—正しく新しい認識」『千寛宇先生還暦記念史学論叢』
崔永禧、1991「壬辰倭乱の再照明」『国史館論叢』30、国史編纂委員会
崔永禧、1992「壬辰倭乱に対する利害の問題点」『韓国史論』22、国史編纂委員会
崔永禧、1992「壬辰倭乱研究のための提言」『アジア文化』8、翰林大アジア文化研究所
許善道、1992「壬辰倭乱史論—壬辰乱の正しい認識」『韓国史論』22、国史編纂委員会

崔永禧、1998「壬辰倭乱に対するいくつかの意見」『南冥学研究』7、慶尚大南冥学研究所、晋州
³² これに関連する代表的成果として、1992『韓国史論』22「壬辰倭乱の再照明」、国史編纂委員会；1991『壬辰倭乱400周年学術大会、壬辰倭乱と全南』全羅南道；1993『壬辰水軍活動研究論叢』海軍軍史研究室などをあげることができる。

³³ 朴成植、1986「壬辰倭乱の研究—壬辰、癸巳年晋州戦闘を中心に」嶺南大博士学位論文、慶山
李貞一、1989「壬辰倭乱研究」中央大博士学位論文、ソウル
趙媛来、1991「壬辰湖南義兵に関する研究」国民大博士学位論文、ソウル
金永淑、1992「忠武公李舜臣研究」慶熙大博士学位論文、大邱
金弘、1993「壬辰倭乱の軍事史的研究」慶北大博士学位論文、大邱

このように研究の基礎作業といえる関連文献資料の収集や整理も次第に進展し³⁴、特に、壬辰倭乱関連の人物の文献資料が体系的に研究されて普及し、その方面の研究はさらに活発になるとともに内容を深めている。こうした傾向は地方自治制が実施されてからさらに強くなっている。

こうして壬辰倭乱研究は個別の戦闘史³⁵を含む軍事的側面における研究成果³⁶のほかにも、社会・文化・経済・思想などの多様な側面からの深みのある研究成果があがり、その中でも湖南・湖西・慶尚の義兵活動に関連する部分はかなり具体的で、比重ある成果を得た³⁷。

-
- 金康植、1998、「壬辰倭乱期慶尚右道の義兵運動」釜山大博士学位論文、釜山
郭鎬濟、1998、「壬辰倭乱期湖西義兵研究」忠南大博士学位論文、大田
李敏雄、2002、「壬辰倭乱海戦史研究」ソウル大博士学位論文、ソウル
- ³⁴ 亜細亜文化社、1984『壬辰倭乱関係文献総刊』1-3
壬乱史料編纂委員会、1990・1992『湖南地方壬辰倭乱史料集』1-4、全羅南道
- ³⁵ 丁仲煥、1981「壬辰倭乱時の釜山地区戦闘」『軍史』2、国防部戦史編纂委員会、ソウル
朴性植、1982「癸巳晋州城戦闘小考」『慶北史学』4、慶北大史学科、大邱
趙成都、1982「鳴梁海戦研究」『軍史』4、国防部戦史編纂委員会、ソウル
朴性植、1986「壬辰倭乱の研究—壬辰・癸巳年晋州城戦闘を中心に」嶺南大博士学位論文、慶山
李章熙ほか、1989「壬辰倭乱時の泗川戦闘とその戦跡地」『軍史』19、国防部戦史編纂委員会、ソウル
崔永禧、1992「壬辰倭乱の最初の戦闘について」『水邨朴永錫教授華甲記念韓国史学論叢』(上)
金鍾基、1993「釜山浦海戦」『壬乱水軍活動研究論叢』、海軍軍史研究室、鎮海
鄭鎮述、1993「閑山島海戦研究」『壬乱水軍活動研究論叢』、海軍軍史研究室
崔孝軾、1994「壬辰倭乱時の永川城奪還戦闘についての考察」『大丘史学』47、大邱史学会
趙浚来、1996「丁酉再乱と順天倭橋城戦闘」『アジア文化』12、翰林大アジア文化研究所、春川
金鍾基、1997「制海権の観点から見た李舜臣の海洋戦略」『海洋戦略』95、海軍大学、鎮海
北島万次、1998「壬辰倭乱と晋州城戦闘」『南冥学研究』7、慶尚大南冥学研究所、晋州
- ³⁶ 朴俊炳、1983「壬乱中の火薬兵器技術の開発」国民大修士論文、ソウル
許善道、1983・84「神器秘訣—韓国火薬兵器の装放法を中心に(上・下)」『韓国学論叢』5・6集
鄭夏明、1991「朝鮮時代の碗口と震天雷」『陸士論文集』40、陸軍士官学校
朴哲暁、1994「壬辰倭乱と火薬兵器」建国大修士論文
朴哲暁、1995「壬辰倭乱期の朝鮮軍の火薬兵器に関する一考察」『軍史』30、国防軍史研究所、ソウル
朴哲暁、1996「東アジア三国の武器製造と交流—15、16世紀を中心に」『学芸誌』5、陸軍博物館
朴哲暁、1996「壬辰倭乱期における朝日両国の武器体系に関する一考察」『韓日関係史研究』6、韓日関係史学会、ソウル
- 姜性文、1999「幸州大捷における権慄の戦略と戦術」『壬辰倭乱と権慄將軍』、戦争記念館、ソウル
姜性文、2002「朝鮮の歴代火車に関する研究」『学芸誌』8、陸軍博物館、ソウル
朴哲暁、2002「15—16世紀の朝鮮の火器発達」『学芸誌』9、陸軍博物館、ソウル
- ³⁷ 金鎮鳳、1982「壬辰乱期の湖西地方の義兵活動と地方士民の動態に関する研究」『史学研究』34、韓国史学会、ソウル
趙浚来、1982『義兵将金千鎰研究』学文社
李章熙、1983『郭再祐研究』養英閣
文守弘、1983「壬乱中の慶尚左道地方の義兵活動」『南都泳博士華甲記念史学論叢』
宋正炫、1983「壬辰倭乱における湖南義兵」『歴史学研究』XI、全南大史学会、光州
趙浚来、1985「壬乱初期の全羅義兵の性格」『史郷』2、公州師範大学歴史教育科、公州
趙浚来、1985「壬辰倭乱期の全羅道義兵の性格—壬辰年嶺南地域での活動相を中心として」『史郷』2、公州師範大学歴史教育科、公州
李錫麟、1985「壬辰初期義旅の構成および成分分析；重峯義旅を中心に」『湖西文化研究』5、忠北大湖西文化研究所、清州
高錫珪、1988「鄭仁弘の義兵活動と山林基盤」『韓国学報』51、一志社、ソウル
趙浚来、1989「壬乱期の湖南義兵と義兵指導層の性格」『北岳史論』1、国民大国史学科、ソウル
趙浚来、1991「壬乱湖南義兵に関する研究」国民大博士論文、ソウル
李章熙、1992「壬辰倭乱義兵性格の分析」『韓国史論』22、国史編纂委員会、ソウル
趙浚来、1992「壬辰倭乱と海上義兵」『擇窩許善道先生停年記念韓国史学論叢』
金康植、1993「壬辰倭乱期の義兵活動と性格」『釜山大史学』17、釜山大史学科、釜山

この時期に最も活発に活動した研究者は趙浚来である。趙浚来は80年代から湖南義兵に始まり陸戦・明軍・水軍、そして海上義兵に至るまで幅広く内容の深い研究を行った³⁸。特に、壬辰倭乱の義兵の中で湖南義兵が物量をもとに大規模な活動を行って戦乱克服の主要要因として作用したという点と、湖南義兵の性格を1・2次戦争期と区分して、1次の際は国家防衛を目標とした勤皇義兵の性格をもち、2次の時、つまり丁酉再乱の時は郷土防衛を目標とした郷保義兵の性格を持つという点は注目される。

また、1995年に国史編纂委員会から『韓国史29、朝鮮中期の外侵とその対応』が刊行されたが、その当時までの壬辰倭乱研究の成果が反映されているといえる。企画において分量自体も拡大され、執筆者も崔永禧・李章熙をはじめ宋正鉉・趙浚来・孫鍾聲・張學根ら専門家が参与して、当時までの多様な主題と深い内容の研究成果を十分に反映させようとした。例えば、倭乱前の国内外の政治情勢を綿密に分析したものから、戦乱中の農民の実状とともに、全般的な社会相が詳細に叙述されているばかりでなく、日本軍を撃退することができた朝鮮側の戦略・戦術に至るまで非常に詳しく言及している³⁹。

一方、1990年代以降の韓国側のこうした研究傾向は日本側の壬辰倭乱研究に刺激を受けたところが大きい。特に、北島万次は‘豊臣秀吉の朝鮮侵略とその歴史的告発’というサブタイトルで刊行した壬辰倭乱史料解説集『朝鮮日日記・高麗日記』以来、『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』、『豊臣秀吉の朝鮮侵略』、『壬辰倭乱と秀吉・島津・李舜臣』等の研究を通じて、1592年の日本の侵略(文禄の役)に対しては明征服を目標とした第1次朝鮮侵略として、1597年の丁酉再侵(慶長の役)は朝鮮領土奪取を目標とした第2次朝鮮侵略として規定し、過去の日本人学者とは異なる視点を示した⁴⁰。また、貫井正之⁴¹は、豊臣秀吉の朝鮮侵略が朝日両国の民衆生活にどのような影響を与えたのか、つまり朝鮮民衆をテーマにして研究の幅を広げた。この研究は現在までも壬辰倭乱に対する否定的な研究と認識が根強い日本の歴史学界においては珍しい成果で、日本における壬辰倭乱研究の水準を一段階高める契機となったといえるだろう。

梁銀容、1994「壬辰倭乱と湖南の仏教義僧軍」『韓国宗教』19、円光大宗教問題研究所、裡里

趙浚来、1994「丁酉再乱と湖南義兵」『全南史学』8、全南大

崔孝軾、1994「壬辰乱期の慶州寺院の抗戦活動」『芝村金甲周教授華甲紀念史学論叢』

金康植、1995「壬辰倭乱期の義兵の性格変化」『釜山史学』18、釜山大史学科

宋正鉉、1995「義兵の蜂起」『韓国史』29、国史編纂委員会

崔孝軾、1997「壬辰乱初期の慶州義兵活動の研究」『慶州史学』16、慶州史学会、慶州

金康植、1998「壬辰倭乱期の慶尚右道の義兵運動」釜山大博士学位論文、釜山

趙浚来、1998「壬辰倭乱と綾州義兵」『綾州牧の歴史と文化』木浦大博物館・和順郡

³⁸ 趙浚来、2000「壬辰倭乱と湖南地方の義兵抗争」アジア文化社、ソウル

³⁹ 李章熙ほか、1995「朝鮮中期の外侵とその対応」『韓国史』29、国史編纂委員会、ソウル

⁴⁰ 北島万次、1982『朝鮮日日記・高麗日記』(そしえて)

北島万次、1990『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』、校倉書房

北島万次、1995『豊臣秀吉の朝鮮侵略』、吉川弘文館

北島万次、2002『壬辰倭乱と秀吉・島津・李舜臣』、校倉書房

⁴¹ 貫井正之、1996『豊臣政権の海外侵略と朝鮮義兵研究』、青木書店

3. 細部主題別研究現況

1) 壬辰倭乱に対する視点

壬辰倭乱を見る視角および観点と関連するものとして、崔永禧・許善道・李泰鎮らの研究がある。その研究から壬辰倭乱を見る多様な視点が検討されたが、第一に戦争の原因と関連して戦争の性格を規定する視点であり、第二に戦争の勝敗に関連する視点があり⁴²、第三に戦争の被害を中心に性格規定する視点である。最初の視点と関連して注目されるのは、16世紀の韓・中・日の間で活発に展開された国際貿易で日本が直面していた交易上の劣勢を軍力で一挙に打開しようとする目的で豊臣秀吉が戦争を起したという見解である⁴³。第二の視点は、壬辰倭乱を敗北した戦争と見ていた既存の認識に対する反省⁴⁴とともに、従来の殉国史観や英雄史観を止揚して戦争史の立場から客観的な研究を通じて壬辰倭乱を理解しなければならないという主張である。第三の視点は、一部の学問的成果や大衆歴史書的性格の強い成果から提起されたもの⁴⁵で、壬辰倭乱のとき日本に伝播した陶磁器技術や、朝鮮の民衆が日本軍の捕虜となって国際社会に奴隷として売られていったことを強調する視点がこれに該当する。壬辰倭乱を見る視点は、この三つの側面がバランスを保ってこそ正しく成立すると考えられる。

2) 原因

壬辰倭乱の原因は、戦争の性格を明らかにする重要な主題のうちの一つといえる。そのため日本の研究者はおおむね次のような原因を提示している。①豊臣秀吉が織田信長の意図を引き継ぐため、②明国との貿易が断絶していたので勘合貿易を再開するため、③豊臣秀吉個人の征服欲のため、④豊臣秀吉個人の長男鶴松が死亡したため、⑤経済的利得のため、⑥国内統一過程で発生した大名と武士の不満を解消するため等である。

これに対して、韓国側の研究者は、原因について体系的で深度ある分析には至っていないのが実状である。壬辰倭乱の原因を日本の国内情勢と関連付けて把握した韓洵功の先駆的な研究⁴⁶から始まって、対外関係の観点、もしくは国際貿易の観点から分析した一部の研究がある⁴⁷。また、李泰鎮は、マクロの視点から国際関係および国内政治史の流れ、ミクロの視点から戦術的な

⁴² 韓洵功、1952、前掲書

⁴³ 李泰鎮、1986「16世紀東アジアの歴史的状況と文化」『韓国史会史研究』知識産業社、ソウル

⁴⁴ 許善道、崔永禧、前掲書

⁴⁵ 崔書勉、1973「壬辰倭乱の人質—‘織田じゅりあ’に関する史的考察—」『民族文化論叢(鷲山李殷相博士古希記念論文集)』刊行委員会、ソウル

金泰俊、1977『壬辰倭乱と朝鮮文化の東漸』、韓国文化院、ソウル

李進熙、1982『韓国と日本文化』、乙酉文化社、ソウル

李元淳、1985「壬辰・丁酉倭乱時の朝鮮俘虜・奴隷問題」『邊太燮博士華甲記念史学論叢』、三英社

李俊杰、1986『朝鮮時代の日本との書籍交流研究』、弘益齋、ソウル

李採衍、1995『壬辰倭乱捕虜実記研究』、博而精出版社、ソウル

李採衍、1998「韓・日実記文学に表われた壬辰倭乱体験の形象化戦略」『韓国文学論叢』22、韓国文学会、ソウル

⁴⁶ 韓洵功、1952、前掲書

⁴⁷ 李章熙ほか、1995「朝鮮中期の外侵とその対応」『韓国史』29、国史編纂委員会、ソウル

側面までを考慮し、壬辰倭乱の原因を考察した⁴⁸。特に、この主題は、韓日の教科書での記述方式をめぐって両国の認識差を表わすもので、壬辰倭乱の原因についての比較史的考察が必要と考える。

3) 展開過程

壬辰倭乱史の研究で最も大きな部分を占めるのは、やはり戦争の展開過程に関するもので、官軍および義兵、僧軍の戦闘や、明軍との連合による戦闘を扱った研究成果が蓄積されている。壬辰倭乱の戦争史的次元での研究は、李炯錫によって開戦から終戦までの諸戦闘が詳細に戦術的側面から分析され、戦争当事国の朝鮮、明、日本の政治的、軍事的状況に関する理解や、戦略・戦術に関する考察もなされており、戦争の全体像を理解できるようになった⁴⁹。また、既存の軍事史の各部門の成果を基に戦闘の種類を規定して、主要戦闘についての状況を要約した図録を添付し、体系的に戦争史を再検討した徐仁漢の研究⁵⁰などがある。また、壬辰倭乱における主要戦闘についてもそれぞれ研究がかなり進捗しており、多くの成果が発表されている。

① 官軍の活動

壬辰倭乱の期間中、朝鮮の官軍、すなわち正規軍の活動と運用体系についてはこれまで研究が最も不振であった。その理由は、おそらく壬辰倭乱初期の朝鮮軍が連敗を喫した原因が軍事態勢の総体的な不備にあったと見る見解が有力だったためである。こうした視点は明白な事実であるが、朝鮮軍の組織整備と再編にともなう軍事力回復とともに戦況が改善していった。さらに、戦時における正規軍の活動は当然の役割であった点とともに、明軍の派遣とともにこれといった役割を果たせなかっただろうという判断も、正規軍の存在や活動についての研究が少なかった背景と判断される。

実際に官軍の活動全般を扱った研究や陸軍の活動を扱った研究は極めて少なく⁵¹、水軍や海戦、そして李舜臣に関する研究に偏重しているのが実状である。これは、碧蹄館の戦いや龍仁の戦いに対する研究が日本の研究者によって行われているように⁵²勝ち戦を重く見ようとする姿勢が反映された結果と考える。

しかし、80年代以降から壬辰倭乱の中の主要戦闘についての個別研究が次第に進展して、それなりの成果があった⁵³。特に、本格的な軍事史研究の成果としての性格を有する多くの研究が

⁴⁸ 李泰鎮、1980「壬辰倭乱に対する理解におけるいくつかの問題」『軍史』1、戦史編纂委員会

⁴⁹ 李炯錫、1967『壬辰戦乱史』(上・下) 壬辰戦乱刊行委員会(1974年、上・中・下の三巻で改訂出版)

⁵⁰ 徐仁漢、1987『壬辰倭乱史』国防戦史編纂委員会

⁵¹ 張学根、1992「壬辰倭乱期における官軍の活躍」『韓国史論』22、国史編纂委員会、ソウル

李章熙ほか、1995「倭軍撃退の戦略戦術」『韓国史』29、国史編纂委員会、ソウル

⁵² 妻木忠太、1906「碧蹄館付近における戦役について」『史学雑誌』17-8

池内宏、1911「龍仁の戦」『東洋時報』145

⁵³ 丁仲煥、1981「壬辰倭乱時の益山地域戦闘」『軍史』2、国防軍戦史編纂委員会、ソウル

朴性植、1982「癸巳晋州城戦闘小考」『慶北史学』4、慶北大史学科、大邱

趙浚来、1982「第二次晋州城戦闘と金天鎰の戦功問題」『軍史』5、戦史編纂委員会

李熙煥、1983「1983「丁酉再乱時の南原城戦闘について」『全北史学』7、全北大史学会、全州

この部門で行われた。

特に、張學根は、壬辰倭乱が勃発してから終結するまで朝鮮朝廷の官軍運用政策と戦争局面に表われた官軍の動向を詳細に分析し、これを通じて戦乱の長期化要因と性格を究明しようとした⁵⁴。

② 水軍の活動

壬辰倭乱における水軍の活動は、朝鮮が戦乱を克服する決定的な役割を果たした。日本軍が開戦初期から破竹の勢いだった陸上とは違い、壬辰年(1592年)5月初めの玉浦海戦以降の度重なる海戦での敗北は、日本軍の戦意を削ぎ始め、そしてこのことが戦争全体に影響を及ぼしたからである。

水軍の活動に関する研究は、1908年に申采浩が『大韓毎日申報』に「李舜臣伝」を連載してから始まったといえる⁵⁵。当時、征韓論を主張する日本の韓半島侵略に対抗して反日義兵闘争が非常に盛んであったため、民族主義史観によって韓国人の民族意識を呼び覚まそうとする目的で執筆されたのである。この「李舜臣伝」は李舜臣の『乱中日記』と壬辰倭乱時の状啓などの史料を忠実に反映させた最初の李舜臣研究であり、壬辰倭乱海戦史研究である点で重要な意味がある。

以来、李舜臣に対する関心は解放以降に本格化する。李殷相・李允宰らの李舜臣の伝記⁵⁶出

朴性植、1986「壬辰倭乱の研究—壬辰・癸巳年晋州城戦闘を中心に」、嶺南大博士学位論文
李章熙ほか、1989「壬辰倭乱時の泗川戦闘とその戦跡地照査」『軍史』19、国防部戦史編纂委員会
崔孝軾、1991「壬辰倭乱期の慶州戦闘」『慶州史学』10、慶州史学会(東国大國史学科)
崔永禧、1992「壬辰倭乱の最初の戦闘について」『水邨朴永錫教授華甲記念韓国史学論叢』上
崔孝軾、1994「壬辰倭乱時の永川城奪還戦闘についての考察」『大邱史学』47、大邱史学会、大邱
池承鍾、1995「16世紀末晋州城戦闘の背景と戦闘状況に関する研究」『慶尚大慶南文化
究所

趙浚来、1996「丁酉再乱と順天倭橋城戦闘」『アジア文化』12、翰林大アジア文化研究所、春川
北島万次、1998「壬辰倭乱と晋州城戦闘」『南冥学研究』7、慶尚大南冥学研究所、晋州
姜性文、1999「幸州大捷における権慄の戦略と戦術」『壬辰倭乱と権慄將軍』、戦争記念館、ソウル
朴哲暁、1999「壬辰倭乱初期戦闘における官軍の活動と権慄」『壬辰倭乱と権慄將軍』、戦争記念館、ソウル
李相薫、1999「都元帥権慄の戦略構想と活動」『壬辰倭乱と権慄將軍』、戦争記念館、ソウル
李章熙、1999「都元帥権慄論」『壬辰倭乱と権慄將軍』、戦争記念館、ソウル
郭鎬濟、2000「壬辰倭乱期の梨峙大捷の意義と再検討」『忠南史学』12、忠南史学会、
金祥起、2000「壬辰倭乱期の権慄の梨峙大捷」『忠南史学』12、忠南史学会
趙浚来、2000「壬辰倭乱初期の二度の錦山戦闘とその戦略的意義」『忠南史学』12、忠南史学会
崔權黙、2000「壬辰倭乱期の錦山戦闘における殉節と梨峙大捷に対する崇揚」『忠南史学』12、忠南史学会
崔永禧、2000「壬辰倭乱史における梨峙大捷の意義」『忠南史学』12、忠南史学会
朴哲暁、2002「壬辰倭乱期における望菴邊以中の軍事活動」『壬辰倭乱期における望菴邊以中の活動と思想』成均館・鳳岩書院、ソウル
朴哲暁、2002「壬辰倭乱期における日本軍の漢城占領と蘆原坪戦闘」『蘆原の歴史を再照明する—壬辰倭乱を中心に』『人文社会科学論文集』31、光云人文社会科学研究所、ソウル
盧永九、2003「壬辰倭乱初期の様相に関する既存の認識の再検討—和歌山県立博物館所蔵‘壬辰倭乱図屏風’に対する新たな理解を基に」『韓国文化』31、ソウル大韓国文化研究所

⁵⁴ 張学根、1992「壬辰倭乱期の官軍の活躍」『韓国史論』22、国史編纂委員会

⁵⁵ 1908年5月の初めから8月中旬までの約100日間連載されたもので、後に1977『丹齋申采浩全集』(丹齋申采浩先生記念事業会)に収録された。

⁵⁶ 李殷相、1946『李忠武公一代記』、国学図書出版部、ソウル

版をはじめこの分野に集中した叙述は1960年代に頂点に達した後、80年代の初めまで続いた。特に、『李忠武公全書』や『乱中日記』の現代語訳を行って大衆化をはかる等、この分野の研究を積極的に主導した李殷相の活動は顕著である。このような雰囲気の中で、60年代には趙仁福・崔碩男ら軍出身の軍史学者によって李舜臣の活動や戦功が強調された壬乱海戦史関連の著書が次々に発表された⁵⁷。その後、70-80年代の李舜臣研究は趙成都によって主導されたが、趙は李殷相以来、この分野で最も大きな業績を残した⁵⁸。

80年代以降、水軍の活動については、研究視点と研究方法論は以前とは異なる新しい傾向を帯びるようになった。例えば、李舜臣の戦功を評価するにあたり、従来とは異なり戦略戦術を通じてその戦争能力を評価しようとする論文が発表された⁵⁹。また、鳴梁海戦のような戦闘事例に関する研究においても、戦勝要因として作用した関防戦術を科学的に分析した論文が発表された⁶⁰。このように水軍の戦闘状況と戦勝過程が具体的な個別研究として発表された点が1980年代以降の研究の特徴といえるだろう。例えば、趙成都・金一相・趙浚来・張學根らによって進められた鳴梁海戦や閑山島海戦など個別の戦闘事例の研究がさらに深められた⁶¹。

壬辰倭乱勃発400周年が過ぎた1990年代以降、壬辰倭乱研究は新たな局面を迎えている。閑山島海戦・釜山浦海戦などの戦闘別研究が行われた中で、朝・明・日の戦線構造を明らかにした論文が発表された。また、朝鮮水軍の戦略戦術および艦載火力の性能についての実証的研究のほかに、正規の水軍と結びついた海上義兵の問題に至るまで多様な研究が進められている⁶²。

李允宰、1946『聖雄 李舜臣』、通文館、ソウル

⁵⁷ 趙仁福の『李舜臣戦史研究』（鳴洋社）は、陸軍士官学校戦史教材用として書かれたが、李舜臣の活動相を集中的に分析・整理しており、崔碩男の『韓国水軍史研究』（鳴洋社）も李舜臣の活動相に関する内容に全体の三分の二を割いている。

⁵⁸ 趙成都は海軍士官学校に在籍しつつ、1973年に『壬辰状草』（トウワン社）を国語訳し、1976年には『忠武公李舜臣』（トウワン社）、1986年には『制勝堂と李忠武公』（藝文社）を記した。

⁵⁹ 許善道、1980「壬辰倭乱における李忠武公の勝捷—その戦略的戦術的意義を中心に」、『韓国学論叢』3、国民大韓国学研究所

羅鐘宇、1981「李舜臣將軍の戦略戦術」、『全北史学』5、全北大史学会、全州

⁶⁰ 趙成都、1982「鳴梁海戦研究」、『軍史』4、戦史編纂委員会

金一相、1985「鳴梁海戦の戦術的考察」、『国防研究』28、国防大学院安保問題研究所

⁶¹ 李載浩、1981「壬乱における水軍と李雲龍將軍」、『軍史』2、戦史編纂委員会、ソウル

崔七鎬、1981「李舜臣將軍の戦略構想と作戦結果」、『軍史』2、戦史編纂委員会、ソウル

許善道、1981「壬辰倭乱における李忠武公の勝捷—その戦略的戦術的意義を中心に」、『韓国学論叢』3、国民大韓国学研究所、ソウル

趙成都、1982「鳴梁海戦研究」、『軍史』4、戦史編纂委員会

張學根、1983「壬乱期の水軍に関する期待と運用策」、『海士論文集』18、海軍士官学校、鎮海

金一相、1985「鳴梁海戦の戦術的考察」、『国防研究』28、国防大学院安保問題研究所、ソウル

趙浚来、1986「壬乱時の海戦と興陽水軍」、『南島文化研究』2、順天大学南島文化研究所、順天

張學根、1987「朝鮮時代の海洋防衛史研究」海軍士官学校、鎮海

趙浚来、1987「壬辰海戦の勝因と全羅沿海民の抗戦」、『鳴梁大捷の再照明』、海南文化院、海南

海南文化院、1987、『鳴梁大捷の再照明』、海南文化院、海南

⁶² 趙成都、1991「壬辰海戦の推移と全羅道水軍の戦果」、『壬辰倭乱と全南』、全羅南道

崔斗煥、1991「鳴梁海戦とカンガンスウォレ」、『許善道教授華甲記念忠武公李舜臣研究論叢』ヨングン文化社

姜永五、1993「壬乱期における朝・日の海軍戦略」、『壬乱水軍活動研究論叢』、海軍軍史研究室

鄭鎮述、1993「閑山島海戦研究」、『壬乱水軍活動研究論叢』、海軍軍史研究室、鎮海

金鍾基、1993「釜山浦海戦」、『壬乱水軍活動研究論叢』、海軍軍史研究室、鎮海

鄭社熙、1994「李舜臣研究—壬辰年以降の戦略と丁酉再乱に関する再検討」、『李基白古希記念韓国史学論

そして、李舜臣と壬辰倭乱海戦史全般の問題を検討した博士学位論文も発表され、この分野に対する研究意欲も一層高まっている⁶³。

また、張學根・李敏雄は壬辰倭乱の海戦の様相を3段階に分け、これを陸上戦とも関連付けて戦局の全般的な状況を分析して、朝鮮水軍の勝因と日本水軍の敗因を明らかにするなど壬辰倭乱海戦史を体系化した⁶⁴。特に、李敏雄は壬辰倭乱の海戦の状況を初期戦争期・講和交渉期・丁酉再乱期に分けて詳細に分析したが、日本の研究成果を幅広く反映させている点が注目される。また、それまでの他の研究が初期海戦での勝利過程を明らかにすることに集中していた点と違って、講和交渉期以降の水軍の動態や丁酉再乱期の状況を詳細に実証している点も学界に大きく寄与したと考えられる。

このように水軍の活動に対する研究成果には見るべきものがあるが、大部分の研究が全羅左水使・李舜臣、水軍統制使・李忠武公の業績を極大化する観点から研究されてきたため、朝日両国の水軍の戦闘力が部分的、分散的に提示され、海戦の勝敗要因をきめ細かに理解するには至っていないのが現実である。この部分に対するさらに幅広い研究が必要であろう。

③ 義兵活動

壬辰倭乱における諸戦闘に関する研究は、特に地方自治制度が実施されてからますます活気を帯び始めたが、大部分が義兵の活動と関連するものである。義兵についての研究のうちまず注目されるのは、義兵の概念や性格に関するものである⁶⁵。ところで、研究者の多くが、義兵の概念について国難克服のための努力と見る傾向が強く、戦争史の視点から義兵をどのように規定するのかという問題についてはあまり進展が見られない。また、多くはないが、壬辰倭乱における義兵全般についての包括的な研究も行われており⁶⁶、義兵に対する具体的な研究が進展しただけに新たな次元での概括が期待されるところである。

壬辰倭乱期の義兵活動についての研究は扱っている主題の範囲によって、義兵運動に関す

叢』下、一潮閣、ソウル

張学根、1995「倭軍撃退の戦略・戦術—海戦」『韓国史』29、国史編纂委員会、ソウル

朴哲暎、2002「丁酉再乱期における朝明水軍の連合作戦と露梁海戦」『忠武公露梁海戦勝捷祭学術発表』、南海

⁶³ 金永淑、1992「忠武公李舜臣研究」慶熙大博士学位論文、ソウル

李敏雄、2002「壬辰倭乱海戦史研究」ソウル大博士学位論文

⁶⁴ 張学根、1995、前掲論文；李敏雄、2002、前掲論文

⁶⁵ 崔永禧、1960「壬辰義兵の性格」『史学研究』8、韓国史学会、ソウル

李載浩、1967「壬辰義兵の一考察」『歴史学報』35・36合併号、歴史学会、ソウル

李錫麟、1985「壬辰初期義旅の構成および成分分析」『湖西文化研究』5、忠北大湖西文化研究、清州

趙浚来、1985「壬辰倭乱期の全羅義兵の性格」『史郷』2、公州師範大学歴史教育科、公州

李章熙、1992「壬辰倭乱における義兵の性格分析」『韓国史論』22、国史編纂委員会、ソウル

金康植、1993「壬辰倭乱期の義兵活動と性格」『釜山史学』17、釜山大史学会、釜山

金康植、1995「壬辰倭乱期の義兵の性格変化」『釜山史学』19、釜山大史学会、釜山

⁶⁶ 金錫禧、1962「壬辰倭乱の義兵運動に関する一考」『郷土ソウル』15、ソウル市史編纂委員会、ソウル

金錫禧、1972「壬辰乱の義兵に関する再考察」『釜山大学校論文集』13、釜山大、釜山

宋正炫、1995「義兵の蜂起」『韓国史』29、国史編纂委員会、ソウル

る全般的な問題を包括的に扱った研究⁶⁷、各地域で活躍した義兵将の戦闘や義兵組織、挙兵の背景などを扱った個別人物中心の研究⁶⁸に大きく分けられる。この他にも民間反乱と義兵運動の関連性に注目した研究もあり⁶⁹、壬辰倭乱期の軍糧調達方法や影響を分析した研究もある⁷⁰。こうした壬辰倭乱期の義兵運動に関する研究の傾向を具体的に整理すると次のようになる。

第一に、義兵活動の背景に関する問題である。この問題だけを研究するケースはないが、主に官軍の敗北要因に注目して考察している。官軍の敗北要因を、支配階級の分裂によって人事や政策が混乱したことにともない、中央政府の行政が民と遊離した状態にあったため根本的な改革が遂行できなかったと強調する見解¹と、地方郡県の社会経済的与件と租税秩序の矛盾による民心離反に原因を求める見解²に分れている。

第二に、義兵の基盤と組織の問題である。この問題は主に社会史的な立場から注目されたが、壬辰倭乱当時の義兵上層部で、義兵部隊を組織し主導的役割を果たした在地士族の義兵基盤や組織に注目した見解が代表的である。つまり、壬辰倭乱克服の重要な動力の一つとして士族の活躍が可能だった社会的動力に注目し、義兵活動は士林の郷村支配策を基盤に展開することができたというものである。16世紀の士林勢力は、勲戚系の収奪政治が郷村社会の安定を脅かす段階に至ると、これを克服するための性理学的郷村自治制度を実現しようと努め、その過程で郷民からの呼応を得たのでこれが義兵活動の基盤になったという見解³である。さらに、在地士族の義兵基盤として通婚圏に注目し、彼らが形成した重層的な婚姻関係と経済的基盤が義兵活動の基礎になったという見解⁴、在地士族が壬辰倭乱前に郷村で施行した郷村統制への努力と制度が義兵の募集に活用され、そして義兵運動が乱後に郷村支配の再確立をもたらしたという見解⁵もある。

一方、義兵活動の基盤を政治史的な観点から注目した研究もある。まず、義兵将である士族の義兵活動が可能だった社会経済的背景を究明し、乱中の義兵活動が壬辰倭乱以降の政治的成長基盤となったという見解⁶や、各門人の倡義人脈を通して学問的紐帯が義兵活動の基盤と組

⁶⁷ 李載浩、1967「壬辰義兵の一考察—官軍と明軍との関係を中心に—」『歴史学報』35・36合併号、歴史学会、ソウル

金錫禧、1972「壬辰乱の義兵に関する再考察」『釜山大学校論文集』13

崔永禧、1975『壬辰倭乱中の社会運動—義兵を中心に』、韓国研究院

⁶⁸ 各地域の義兵に関する研究は、主要な義兵将を中心に行われた。慶尚道では鄭仁弘、郭再祐、金誠一、金沔、権應銖、全羅道の金干鎰・高敬命、忠清道の趙憲、咸鏡道の鄭文孚などを扱った論考が大部分である。

⁶⁹ 李章熙、1969「壬辰倭乱期の民間叛乱について」『郷土ソウル』32

崔權黙、1974「壬辰倭乱時の湖西地方の民間叛乱」『百濟研究』5

⁷⁰ 李章熙、1971「壬辰乱中の糧餉考—明兵の軍糧調達を中心に—」『史叢』15・16合併号

金鎔坤、1980「朝鮮前期の軍糧米確保と運送—壬辰乱当時を中心に—」『史学研究』32、韓国史学会

⁷¹ 崔永禧、1957「壬辰・丁酉乱時の沿岸民の動態」『史叢』2、高麗大史学会

⁷² 金潤坤、1971「壬辰乱勃発直前の地方郡県の実態」『柳洪烈博士華甲記念史学論叢』

⁷³ 李泰鎮、1983「壬辰倭乱克服の社会的動力—士林の義兵活動基底を中心に—」『韓国史学』5、韓国精神文化研究院

⁷⁴ 金錫禧、1989「郭再祐の起兵と社会的基盤」『忘憂堂郭再祐研究』2、忘憂堂記念事業会

⁷⁵ 鄭震英、1987「壬辰乱前後における尚州地方の士族の動向」『民族文化論叢』8、嶺南大民族文化研究所

⁷⁶ 高錫珪、1988「鄭仁弘の義兵活動と士林基盤」『韓国学報』51、一志社、ソウル

織に寄与したという見解⁷⁷があり、全羅道の義兵と官軍の党色に注目し、官軍と義兵に動員された軍事の実態を明らかにした研究⁷⁸もある。

第三に、義兵の性格問題である。壬辰倭乱期の義兵の性格は忠義軍と見るのが一般的である。義兵の性格を、展開した地域や倡義の動機によって忠義軍と郷兵に分ける見解があるが⁷⁹、義兵の主導問題については土族主導論が一般的である⁸⁰。義兵上層部の結合要因としては学縁に注目している。

一方、義兵の性格と関連し、義兵活動の断絶性と連続性の問題にも注目したが、壬辰倭乱期の義兵活動と基盤が前後の時期とどう関連しているのかについては、土族の基盤が壬辰倭乱を契機に強化されたという見解⁸¹と、弱まっていったという見解⁸²がある。

第四に、義兵運動の展開と変化の問題である。これまでは主に初期の義兵活動にのみ注目し⁸³、義兵運動の変化と意味を追求できなかった。義兵活動については各地域の戦闘を考察した戦争史的研究がある⁸⁴。義兵の展開過程で義兵と官軍との関係に注目し、両者は討賊と勤王では一致していたが、戦争の功過や指揮の問題のため対立していたことが明らかになった⁸⁵。義兵の変化時期については、義兵の解体は官軍の整備以降だったという見解⁸⁶、義兵の活動を官軍との推移の中で空官期、官軍活動期、明軍南下期に分ける見解⁸⁷がある。

一方、義兵の反乱軍への転換問題も研究されたが、戦乱中に起った反乱問題を全般的に検討しながら義兵との関係を明らかにした。初期には偶発的で散発的だった反乱が、中期以降、戦争による民生問題の深刻化のために大規模な反乱へと拡大したとの見解⁸⁸があり、個別研究を通じて反乱の主導勢力が民衆であったことを明らかにした研究⁸⁹もある。

以上の既存の義兵研究は大きく二つの方向に注目してきた。まず、戦争史的側面から義兵運動が戦争の勝利をもたらすことができた点と、義兵運動が戦乱中に展開できた朝鮮社会内部の持続性を考察したものであった。なによりも義兵運動は16世紀における変化の中で壬辰倭乱期に義兵運動を先導した土族や、義兵の主力を構成して活動した民の相互の結びつきによって可能

⁷⁷ 李相弼、1995「壬乱倡義人脈小考;『茅谿先生日記』を中心に」『慶南文化研究』17、慶尚大慶南文化研究所

⁷⁸ 趙浚来、1991「壬乱湖南義兵に関する研究」国民大博士学位論文

⁷⁹ 趙浚来、1989「壬乱期の湖南義兵と義兵指導層の性格」『北岳史論』1、国民大史学科

⁸⁰ 崔永禧、1960「壬乱義兵の性格」『史学研究』8

李錫麟、1989「趙憲を中心とした壬乱初期の義兵分析」『又仁金龍徳博士停年記念史学論叢』、刊行委員会、ソウル

⁸¹ 李樹健、1984『韓国中世社会史研究』一潮閣

⁸² 金龍徳、『郷庁研究』韓国研究院

⁸³ 崔永禧、1960「壬辰義兵の性格」『史学研究』8

⁸⁴ 李炯錫、1974『壬辰戦乱史』(上・中・下)、国防部壬辰戦乱刊行委員会

⁸⁵ 李載浩、1967「壬辰義兵の一考察—特に官軍と明軍との関係を中心に—」『歴史学報』35・36合併号

⁸⁶ 崔永禧、1975、前掲書

⁸⁷ 具体的に尚州地域の場合、空官期(1592年8月—10月)、官軍活動期(1592年11月—1593年3月)、明軍南下期(1593年3月—5月)と区分した。(鄭震英、1987「壬乱前後の尚州地方の土族の動向」『民族文化論叢』8)嶺南大民族文化研究所

⁸⁸ 李章熙、1968「壬辰倭乱中の民間叛乱について」『郷土ソウル』32

⁸⁹ 崔槿黙、1974「壬辰倭乱時の湖西地方の民間叛乱」『百濟研究』5

朴容淑、1994「李夢鶴に関する考察」『朝鮮後期社会史研究』、ヌルハムケ

となった。このため壬辰倭乱における義兵運動は、16世紀の社会構造、在地士族による郷村支配秩序の中で理解されなければならない。他方、義兵研究は地縁や門中との関連によって、実状とかけ離れ、誇張された解釈や評価がなされている場合もなくはないので、研究成果を検討する際には慎重を要する。

④ 明軍の参戦

明軍の参戦については、出兵の目的として戦争が明国内に拡大するのを防ぐためであったことを明らかにして、明軍による弊害について考察した劉九成の研究⁹⁰以来、明軍が派遣された背景、戦争における明軍の作戦とそれに伴う戦争の推移の変化、明軍に対する軍糧補給の問題、参戦が及ぼした社会的・文化的影響に至るまで様々な側面について研究されている⁹¹。また、戦争が終わった後、明軍を引き続き駐屯させようとする主張と、軍糧不足問題などを挙げて、軍の撤退を要求する朝鮮側の立場との違いを考察した研究もあり⁹²、明軍の参戦と戦争過程における明軍の役割などはある程度究明されたといえるだろう。

特に、最近、この分野を主導している韓明基は、明の派兵動機が表面的には朝鮮を救援するためとなっていたが、実際には中国の安全を保障するためであった点を指摘している⁹³。また韓は、明によって恣意的に講和論が提起されたばかりでなく、講和論議の過程で朝鮮の意見や民族感情が完全に無視され、明官吏の越権行為、直轄統治論の台頭や内政干渉などを通じて、当時の朝鮮の主権が甚だしく侵害されていたと指摘した。そして、戦乱以降、朝鮮で再造之恩という観念が形成された背景とその意味を分析した。つまり、朝鮮の一角では明軍に対して否定的に見る視点があったにもかかわらず、戦争が終結する頃、朝鮮の朝野では‘明が朝鮮を救援し、再建してくれた’と考える再造之恩という観念が形成されて、さらには明に対する慕華意識が次第に強くなっていったという。そして、‘再造之恩’観念の拡散は、その後の両国関係が展開していく過程で、明にとっては朝鮮に対して政治・軍事的援助を要求できる名分的根拠となり、朝鮮にとっては大きな負担になったと指摘した。

ただし、壬辰倭乱が東アジア規模の国際戦争であるにもかかわらず、壬辰倭乱と東アジア国際秩序、もしくは三カ国の歴史変化に及ぼした影響などを本格的に扱った研究はほとんどないといえる。朝鮮、明、日本が直面していた環境を分析し、壬辰倭乱が起った背景を考察した後、壬辰倭乱が東アジアに残した‘影響’の実体を具体的に探求する努力が必要である。

⁹⁰ 劉九成、1976「壬乱時における明兵の来援考—朝鮮の被害を中心に」『史叢』20、高麗大史学会、ソウル

⁹¹ 崔韶子、1977「壬乱時明の派兵についての論考」『東洋史学研究』11、東洋史学会

崔韶子、1992「壬辰倭禍と明朝」『アジア文化』8、翰林大アジア文化研究所、春川

趙媛來、1992「明軍の出兵と壬辰戦局の推移」『韓国史論』22、国史編纂委員会、ソウル

張学根、1993「壬乱初期明軍の来援と軍糧論議」『壬乱水軍活動研究論叢書』、海軍軍事研究室、鎮海

鄭炳喆、1996「明末清初の華北社会研究」ソウル大博士学位論文、ソウル

韓明基、1997「宣祖代後半～仁祖代初期の対明関係研究」ソウル大博士学位論文、ソウル

韓明基、1997「壬辰倭乱時期明軍参戦の社会・文化的影響」『軍史』35、国防軍事研究所

⁹² 柳承宙、1985「倭乱後の明軍の留兵論と撤兵論」『千寛宇先生還暦記念史学論叢』、正音文化社、ソウル

⁹³ 韓明基、1999「壬辰倭乱と韓中関係」、歴史批評社、ソウル

4) 軍事制度・軍事動員体制・作戦指導

壬辰倭乱期は、朝鮮前期の軍事制度が崩壊して朝鮮後期の体制に改編されていく過渡期といえる。特に、中央軍制の場合は五衛体制から五軍営体制に改編され、それぞれの軍門がかなりの時差を置いて創設されたため、五軍営体制として定着するまで軍営ごとに多くの変化を経たからである。

この時期の中央軍制についての研究は、車文燮が軍役制度の変遷過程を考察する過程で訓練都監の設置を説明したのが最初である⁹⁴。車文燮はこの研究で、朝鮮前期の軍役制度の矛盾によって私代立の弊害が深刻化する中で壬辰倭乱が起り、兵農を分離した傭兵制としての訓練都監が成立し、給料兵制が採択されたが、こうした変化には戦争の渦中で生計手段が絶たれた貧民が多数存在する現実が反映されていたことを明らかにした。車は続いて、宣祖年間の成立期の訓練都監を研究し、部隊編成や指揮体系などを整理し、壬辰倭乱初期の戦闘での経験をもとに戚継光の浙江兵法が受け入れられて、三手兵制や東伍編成が訓練都監組織体系に反映されたことを明らかにした。以上の中央軍制についての研究を通じて、五軍営体制に改編されていく過渡期的な様相がかなり明らかにされたが、五衛体制がどのように解体していったのか、五軍営体制が次第に整備され、これによる都城防衛体制が確立する前まで一部の機能が維持された五衛体制と、新たに設置された軍営が、どのような関係の中で運営されていたのかということについては、いまだほとんど説明がされていない。また各軍営が、王権や中央権力の保護装置としてどのように体系的に結びついて可能となったのかについても明白な説明がなされていない。これには朝鮮前期の五衛体制自体にも十分な説明がないことが影響していると考えられるが、朝鮮前期よりもこの時期のものが関連史料がはるかに多いという点から、この時期の五衛体制に対する研究が朝鮮前期の五衛体制を説明するのに重要なカギとなるものと考えられる。

地方軍制は中央軍制に比べて多少研究が不振であったが、1990年代に入って活発になった分野である。壬辰倭乱当時の地方軍制と国防体制が放軍収布の蔓延、鎮管体制の形骸化とそれに対応する分軍法の一つとしての制勝方略の実施へと展開した事実は、李泰鎮⁹⁵、許善道⁹⁶らの研究によって比較的詳しく考察された。壬辰倭乱以降の地方軍制研究も車文燮がリードした⁹⁷。車文燮は、営將制と東伍軍の研究を通じて壬辰倭乱を遂行する過程で、地方の軍事力増強を目的に浙江兵法によって東伍法に編成された東伍軍が設置され、居住地で訓練を受けて防御を担当し、鎮管体制の弱点を補完するための手段として営將を置き、訓練と指揮を担当させたことを明らかにした。さらに、車文燮は、兵馬防禦營についての研究を通じて、仁祖代以降に営將制が定着するに先立ち、壬辰倭乱中に既に防禦營が首都圏防禦や平安道、咸鏡道の防備を強化す

⁹⁴ 車文燮、1970「宣祖朝の訓練都監」『史学志』4、檀国大史学会、ソウル

⁹⁵ 李泰鎮、1968「16世紀末の国防体制」『韓国軍制史』、陸軍本部、ソウル

⁹⁶ 許善道、1973「鎮管体制復旧論研究－柳成龍軍政改革の基本施策」『国民大学論文集1、国民大、ソウル

許善道、1973・74「制勝方略研究－壬辰倭乱直前の防衛体制の実状－」上・下『震檀学报』36・37、震檀学会、ソウル

⁹⁷ 車文燮、1968「朝鮮後期の営將について」『史叢』12・13、高麗大史学会、ソウル

車文燮、1973「東伍軍研究」『朝鮮時代軍制研究』檀国大出版部、ソウル

るために設置されて運営され、鎮管体制の守令が鎮將を兼ねる弱点を補ったことを明らかにして、地方軍制運営の全般を総合的に理解できるようにした⁹⁸。

このほかに、許善道は国家政策の次元で行われた地方軍制の強化に関する論議を考察する一方、一次資料を通じて鎮管体制の問題点がどのように補強されていったかを明らかにした⁹⁹。李謙周も東伍軍が経済的負担の問題と地方軍制を通じて、地方民を統制しようとする意図と関連して既往の鎮管体制を補強するレベルで運用されたことを明らかにした¹⁰⁰。最近、徐台源の研究によって¹⁰¹、この時期の東伍軍と營將制の具体的な姿が明らかにされたが、倭乱期の東伍軍運用が基本的に鎮管体制に立脚したものだっただけ¹⁰²、それとも制勝方略に立脚したものだっただけ¹⁰³はまだ明らかになっていない。

また、水軍制度については、方相鉉が水軍統制營の設置過程と施設、軍額と兵船・兵器の配置、下部組織および指揮体制に至るまで詳細に考察し、壬辰倭乱当時の李舜臣が率いた水軍の活躍相を合理的に理解するための重要な基礎を築いた¹⁰⁴。

一方、壬辰倭乱期は、軍役制度においても朝鮮前期的な体制が崩れ、後期的体制へと移行していた時期である。しかし、この時期の軍役制度に対する理解の重要性に照らしてみると研究成果は多いとは言えない。車文燮は、朝鮮前期の軍役制度を兵農一致的国民皆兵制と認識し、それが土地分給によって支えられないまま兵種に従って保人支給に差等がもうけられ、矛盾が生じて崩壊したと理解し、壬辰倭乱という大戦争が起って社会経済的条件が不備な状態で傭兵制を導入することになったと説明している¹⁰⁵。尹用出も似たような視点から壬辰倭乱期の軍役制の変化を考察し、国役を担う農民の対立や放軍収布の蔓延に対する抵抗が大きな影響を及ぼして、徭役の物納化が進んだことと同じ脈絡で軍役の変化が進んだと理解した¹⁰⁶。この他に給料兵制に対する財政負担と関連して、壬辰倭乱が終わるとすぐに兵農一致的な制度に還元しようという論議が起る中、給料兵制が定着する過程を検討した金鍾洙の研究¹⁰⁷、国境地域という特性にともない放軍収布制が蔓延せず、壬辰倭乱のときも強力な戦闘力を発揮できた咸鏡道の土兵を検討

⁹⁸ 車文燮、1990「朝鮮後期の兵馬防禦營設置考」『国史館論叢』17、国史編纂委員会(1996『朝鮮時代軍事関係研究』檀国大出版部、ソウル)に再収録

⁹⁹ 許善道、1973「『鎮管体制復旧論』研究—柳成龍の軍制改革の基本施策—」『国民大学論文集』1、国民大、ソウル

許善道、1973・74「制勝方略研究—壬辰倭乱直前の防衛体制の実状—」『震檀学報』36・37、震檀学会、ソウル

¹⁰⁰ 李謙周、1977「壬辰倭乱と軍事制度の改編」『韓国軍制史』、陸軍本部、ソウル

¹⁰¹ 徐台源、1993「東伍軍の設置意義に関する研究」『紀全女子大学論文集』13

徐台源、1998「壬辰倭乱中の軍制改編と東伍軍」『朝鮮後期營將制研究』東国大博士学位論文

徐台源、1999「營將制施行の歴史的背景」『朝鮮後期地方軍制研究』、慧眼、ソウル

¹⁰² 代表的な論者として許善道を挙げることができる(1992「朝鮮時代營將制」『韓国学論叢』14、国民大韓国学研究所)。

¹⁰³ 代表的な論者として車文燮を挙げることができる。

¹⁰⁴ 方相鉉、1990「朝鮮後期水軍統制使研究—水軍統制營の設置背景を中心に」『国史館論叢』17、国史編纂委員会、ソウル

¹⁰⁵ 車文燮、1961「壬辰以降の良役と均役法の成立」『史学研究』10・11、韓国史学会

¹⁰⁶ 尹用出、1989「壬辰倭乱時期の軍役制の動揺と改編」『釜山大史学』13、釜山大史学科

¹⁰⁷ 金鍾洙、1990「17世紀の軍役制の推移と改革論」『韓国史論』22、ソウル大國史学科

した李章熙について扱った研究もある¹⁰⁸。

そして、戦争遂行過程において、軍事指揮体系が混乱をきたし、都體察使・都元帥の監督および指揮権が分化して整理される過程を明らかにした車文燮・沈勝求の研究は、壬辰倭乱全般の理解に極めて重要である¹⁰⁹。また、戦争の勝敗を左右できる重要な問題である軍糧の確保手段および供給に関する研究も発表された¹¹⁰。このほかに日本軍の占領政策やその影響を考察した研究¹¹¹、戦争中において軍を指揮する将校層の輩出のために武科が拡大実施された点についても研究された¹¹²。

5) 軍事施設・装備・武器

壬辰倭乱において欠かすことができないもう一つの分野が城郭をはじめとして、軍事交通、通信施設、装備・武器に関する理解である。この分野は実際の軍事動員体制や軍事組織にも影響を及ぼすといえる。

壬辰倭乱期の軍事施設については研究がまだ充分ではない。車勇杰は、壬辰倭乱が起る前に下三道の山城や邑城を修理するなどの備えがあったが、本来、小規模の侵入に備えるためであったために、日本軍による大規模な侵入にはあまり効果がなく、壬辰倭乱を契機として中国の築城術に絶対的な影響を受けることになったほか、倭城からも一部影響を受けたことを明らかにした¹¹³。また、李章熙は、朝鮮の伝統的な外的防御手段である山城を中心とする戦闘が、壬辰倭乱の時も依然として効果があり、軍糧の補給が困難な日本軍に対して民衆の生活に被害を及ぼしてまでも清野策を用いて、その効果を大きくしたことを論証した¹¹⁴。そして、許善道は、壬辰倭乱における最後の地上戦の激戦地で、朝・明連合軍が水・陸両面から攻城戦を展開した倭橋城に関する研究¹¹⁵を、閔徳植は、南原城図を中心として丁酉再乱(慶長の役)時の南原城に関して具体的な考察を行った¹¹⁶。

軍事施設に関する研究が多少不振であるのに対して、軍事装備に関する研究は火薬武器を中心にかなり成果が蓄積され、武器体系の変化にともなって軍事組織や戦術にもかなりの変化が

¹⁰⁸ 李章熙、1984「朝鮮前期の土兵について」『監史鄭在覚教授古希紀念東洋史学論叢』

¹⁰⁹ 車文燮、1993「朝鮮中期倭乱期の軍令・軍事指揮権研究—都體察使・都元帥を中心に—」『韓国史学』5、韓国精神文化研究院、ソウル

沈勝求、1999「壬辰倭乱期軍事指揮権の推移と性格」『壬辰倭乱と権慄將軍』、戦争記念館

¹¹⁰ 李章熙、1971「壬乱中の糧餉考—明兵の軍糧調達を中心に—」『史叢』15・16、高麗大史学会、ソウル

金鎔坤、1981「朝鮮後期の軍糧米確保と運送—宣祖～顕宗年間を中心に—」『韓国史論』9、国史編纂委員会

金康植、1996「壬辰倭乱中の軍糧調達策と影響」『文化伝統論集』4、慶星大郷土文化研究所

李章熙、1996「壬辰倭乱期の屯田経営について」『東洋学』26、檀国大 東洋学研究所、ソウル

¹¹¹ 朴哲暎、2001「壬辰倭乱期日本軍の占領政策と影響」『軍史』44、国防部 軍史編纂研究所、ソウル

¹¹² 沈勝求、1997「壬辰倭乱期の武科の運営実態と機能」『朝鮮時代史学報』1、朝鮮時代史学会、ソウル

¹¹³ 車勇杰、1981「朝鮮後期の閔防施設の変化過程—壬辰倭乱前後の閔防施設に関するいくつかの問題—」『韓国史論』9、国史編纂委員会、ソウル

¹¹⁴ 李章熙、1995「壬乱期における山城修築と堅壁清野について」『阜村申延澈教授停年退任紀念史学論叢』、イルウン書閣、ソウル

¹¹⁵ 許善道、「順天(昇州)倭橋城(新城里)考」『震檀学報』71・72、震檀学会

¹¹⁶ 閔徳植、1993「丁酉再乱時の川上久国が描いた南原城図について」『宋甲鎬教授停年退任紀念論文集』

起こったことが説明されている。高麗末以降の火薬武器の発達について研究してきた許善道がこの分野の研究をリードしており、壬辰倭乱勃発時においては火薬武器の発達が停滞状態にあったが、壬辰倭乱をきっかけに日・明軍が使用する火薬武器の影響を受けて、再びある程度発達することになったと明らかにした¹¹⁷。これとともに当時使用されていた火薬武器に関する具体的な研究が行われたが、壬辰倭乱当時に使用された朝鮮軍と日本軍の武器体系の実状に関する研究¹¹⁸から火薬兵器の導入にともなう戦術の変化¹¹⁹、具体的な戦術運用に関連する研究¹²⁰に至るまで多様な研究が発表された。

水軍の装備や武器体系に関する研究は、まず崔永禧の研究から始まり¹²¹、比較的多くの成果が蓄積されている。その中でも研究の焦点となっているのは亀甲船に関するもので、金在瑾をはじめとする数名の研究者のよって、亀甲船の起源や規模、構造、建造場所などに関する研究が行われた¹²²。しかし、壬辰倭乱当時の亀甲船については具体的な記録を確保できていないため、規模や構造などに関して見解の相違がみられる。このほかに壬辰倭乱時の朝鮮・日本・明の軍船の特性を考察した研究¹²³と水軍の活躍の理解に役立つ戦船の火薬武器に関する研究がある¹²⁴。

¹¹⁷ 許善道、1966「李朝中期の火器の発達—停滞期の趨勢」上・下、『歴史学報』30・31、歴史学会、ソウル
許善道、1969『韓国火器発達史』、陸軍士官学校博物館
許善道、1994『朝鮮時代火薬兵器史』、一潮閣、ソウル

¹¹⁸ 朴俊炳、1983「壬辰乱中の火薬兵器技術の開発」、国民大修士学位論文、ソウル
許善道、1983・84「神器秘訣—韓国火薬兵器装放法を中心に(上・下)」、韓国学論叢5・6
鄭夏明、1991「朝鮮時代の碗口と震天雷」『陸士論文集』40、陸軍士官学校、ソウル
朴哲暎、1994「壬辰倭乱と火薬兵器」建国大 修士学位論文、ソウル
朴哲暎、1995「壬辰倭乱期の朝鮮軍の火薬兵器に関する一考察」『軍史』30、国防軍史研究所、ソウル
朴哲暎、1995「壬辰倭乱期における火薬兵器の導入と戦術の変化」『学芸誌』4、陸軍博物館、ソウル
朴哲暎、1996「東アジア三国の武器製造と交流—15、16世紀を中心に」『学芸誌』5、陸軍博物館、ソウル
朴哲暎、1996「壬辰倭乱期における朝日両国の武器体系に関する一考察」『韓日関係史研究』6、韓日関係史学会、ソウル

朴哲暎、2002「15—16世紀の朝鮮の火器発達」『学芸誌』9、陸軍博物館、ソウル

¹¹⁹ 朴哲暎、1995・1996、前掲論文

盧永九、1997「宣祖代の紀效新書の普及と陣法論議」『軍史』34、国防軍史研究所、34

¹²⁰ 姜性文、1999「幸州大捷における権慄の戦略と戦術」『壬辰倭乱と権慄將軍』、戦争記念館、ソウル

姜性文、2002「朝鮮の歴代の火車に関する研究」『学芸誌』9、陸軍博物館

¹²¹ 崔永禧、1958「亀船考」『史叢』3、高麗大史学会、ソウル

¹²² 趙成都、1965「亀船考」『研究報告』2、海軍士官学校、鎮海

金在瑾、1971『朝鮮王朝軍船研究』、一潮閣、ソウル

金龍国、1977「亀甲船の起源と発達—いくつかの問題点の補充を兼ねて」『国防史学会報1977年論文集』、国防史学会、ソウル

南天祐、1976「亀船の構造に関する再検討」『歴史学報』71、歴史学会、ソウル

朴惠一、1979「李舜臣亀船の鉄装甲と李朝鉄甲の現在の原型との対比」『韓国科学史学会誌』1—1、韓国科学史学会、ソウル

朴炳柱、1982「亀船の建造場所について—雙鳳船所を中心に」『軍史』5、戦史編纂委員会、ソウル

朴惠一、1982「李舜臣亀船の鉄装甲についての留保的注釈」『韓国科学史学会誌』4—1、韓国科学史学会、ソウル

朴惠一、1985「李舜臣の亀船(1592)の鉄装甲と慶尚左水使の鱗甲記録に対する注釈」『韓国科学史学会誌』7—1、韓国科学史学会、ソウル

金在瑾、1991「亀船の大きさや隻数の変遷」『国際海洋力シンポジウム発表文集』、韓国海洋研究所、ソウル

方相鉉、1991「朝鮮亀船の接木性研究(剣船と板屋船接木)」『慶熙史学』16・17号、慶熙大史学科

張学根、1995「軍船としての原型亀船—亀船改造論を中心に」『昌原史学』2、昌原大史学、昌原

¹²³ 金在瑾、1993「壬辰倭乱期における朝・日・明の軍船の特性」『壬辰水軍活動研究論叢』、海軍軍史研究室、

6) その他(降倭、被擄人、民衆の生活相など)

このほかにも壬辰倭乱を理解するためには、投降日本軍の問題(降倭)、朝鮮被拉人の問題、民衆の生活相、朝鮮の被害状況、壬辰倭乱の政治・経済・社会的影響などの様々な分野の研究が行われなければならないが、まだ充分ではない。当時日本軍によって多くの文化財が焼失したり略奪された朝鮮は大きな被害を被った。一方の日本は、連行した学者を利用して儒学者を養成して学脈を形成した。また、陶磁器産業を育成して大きな発展を遂げたにもかかわらず、これについての本格的な研究が充分でない¹²⁵。

また、朝鮮は戦乱によって『承政院日記』や『高麗王朝実録』などの重要史書や王宮、官衙に保管していた各種の書類を失った。このため韓国史を研究して復元するのに大きな困難がともなう。これに反して日本は、略奪した多くの書籍や活字、陶磁器などの文化財、被虜人の知識や技術を利用して学問、文化を発展させて江戸時代における日本文化の一つの軸となった。

壬辰倭乱中に起ったこうした文化財の毀損や略奪は、戦後両国に大きな影響を及ぼしたにもかかわらず、研究がほとんど行われていない。最近、文化財管理局を中心に日本に所蔵されている文化財を調査したが、諸般の事情により初歩的な段階に止まっているという¹²⁶。

① 降倭

壬辰倭乱の間、日本軍の中から戦争中に朝鮮に投降した人々、すなわち‘降倭’と呼ばれた者に対する研究は数編しかない¹²⁷。その研究を通じて降倭の一人の‘沙也可’という人物が知られるようになった。降倭の多くは生き残るために朝鮮名を名のり、侵略者・加害者という自身の出自を隠して朝鮮社会に同化したと指摘している。特に、李章熙は、倭軍が投降した理由を大きく二つに分けているが、その中で降倭の誘致時期、降倭の活用と戦後処理など全般的な状況について詳しく分析している。また、降倭と被虜朝鮮人との違いを明らかにしたが、朝鮮人被擄人は日本の陶磁器技術を発展させ、新儒学の画期的基盤を提供するなどなど、非常に肯定的な役割を果たしたが、降倭の役割は相対的に小さく、鳥銃の使用法や新式鳥獣の製造、火薬の製造など主として国防技術に関する部分であり、生活文化的な側面は微々たるものと評価した。

鎮海

¹²⁴ 鄭鎮述、1995「壬辰乱期の朝鮮水軍の武器体系」『学芸誌』4、陸軍博物館

¹²⁵ 金泰俊、1975「日本の新儒学成立と朝鮮学者－壬辰前後の朝鮮文化の対日影響を中心に」『論文集』8、明知大学校、ソウル

李進熙、1982『韓国と日本文化』、乙酉文化社、ソウル

李俊杰、1986『朝鮮時代の日本との書籍交流研究』、弘益齋、ソウル

孫寶基、1987「壬辰倭乱と日本の活字印刷術」『愛山学報』5、愛山学会、ソウル

孫寶基、1993「壬辰倭乱時に日本に渡った金属活字印刷術」『古印刷文化』1、清州古印刷博物館

孫弘烈、1994「壬辰倭乱と朝鮮の医学」『清大史林』6、清州大史学会、清州

¹²⁶ 文化財研究所、1991『日本所在韓国典籍目録』

文明大、1992「在日韓国仏画調査」『講座美術史』4、韓国美術史研究所、ソウル

文化財研究所、1995『日本所在文化財図録』

柳麻理、1996「日本所在の韓国仏画調査－京都・奈良地方を中心に」『文化財』29、文化財管理局

¹²⁷ 李丙燾、1953「壬辰時の降倭と金忠善」『李忠武公350周年記念論叢』、ソウル

李章熙、1971「壬辰中の投降倭兵について」『韓国史研究』6、韓国史研究会、ソウル

② 被擄人

韓国側の被虜人研究は日本側の関連研究に比べて時期的に遅れ、研究成果も少ない。これは、韓国歴史学界の壬辰倭乱研究が主として義兵や軍制、朝鮮の戦勝に関連した部分、その他に民乱や外交に多くの関心が集中していたためだといえよう。

韓国の立場からの最初の被擄人研究は在日韓国人学者の崔書勉によってなされた¹²⁸。崔は、壬辰倭乱期の日本の連行行為についての綿密な分析を通じて、当時の朝鮮人の連行が偶発的なものではなく政策的次元で行われたと主張した。

申一徹は、日本に連行された陶工が起した日本の陶磁器文化を、特に李参平の業績を中心に紹介している¹²⁹。金泰俊は、被虜人による日本への文化伝授を比較文化的アプローチにより検討している¹³⁰。また、李元淳は、日本に連れ去られた被擄人の行方を二つに分けて分析している¹³¹。特に、壬辰倭乱を‘奴隷戦争’と規定している。つまり、日本人奴隷商人だけでなく朝鮮侵略戦争に出陣した諸大名までも奴隷獲得や売買で暴利を得ようとしたので、倭乱は奴隷戦争の性格をもつようになったと評価している。

被擄人に対する文化的側面からのアプローチは、被擄人の記録を文学的作品としてその価値や意味を付与するもので、その最初の研究は蘇ジェヨンによって行われた。そのほかにも被擄人の記録を対象とする文学的側面からの研究が多数あるが、歴史的アプローチを試みる本論文では省略する。ただ、李採衍の『壬辰倭乱捕虜実記文学研究』は、被擄人の記録を‘実記文学’という文学ジャンルに分類して積極的に活用している。また、被擄人の記録を網羅した研究成果を発表し、注目される¹³²。

このほかにも戦後に朝鮮被擄人の送還問題が朝日間の交渉再開のための重要なきっかけとなり、徳川幕府の成立、近世日本儒教の成立、日本文化に及ぼした影響とも関連して研究された¹³³。

4. 壬辰倭乱に対する新たな視角形成のための提言

壬辰倭乱は東アジアの秩序を揺り動かし国際戦争であり、戦争後の三国の政治秩序は大き

¹²⁸ 崔書勉、1973「壬辰倭乱の人質―‘織田じゅりあ’に関する史的考察―」『民族文化論叢(鷲山李殷相博士古希記念論文集)』、刊行委員会、ソウル

¹²⁹ 申一徹、1976「壬辰時に連行された朝鮮陶工たち―陶祖李参平碑を訪ねて」『文学思想』1976年10月号

¹³⁰ 金泰俊、1977「高麗の子孫と壬辰の陶磁文化」『捕虜学者と日本の新儒学』『壬辰倭乱と朝鮮文化の東漸』、韓国文化院、ソウル

¹³¹ 李元淳、1985「壬辰・丁酉倭乱時の朝鮮俘虜・奴隷問題」『邊太燮博士華甲記念史学論叢』、サムン社、ソウル

¹³² 李採衍、1995『壬辰倭乱捕虜実記研究』、博而精出版社、ソウル

李採衍、1998「韓・日実記文学に表われた壬辰倭乱体験の形象化戦略」『韓国文学論叢』22、韓国文学会、ソウル

¹³³ 金鍾旭、1974「壬辰後の朝鮮と日本の復交」『日本研究』

李東根、1995「壬辰倭乱と文学的対応」『冠岳語文研究』20、ソウル大外国語国文学科、ソウル

李乃沃、1999「戦争を通じた文化交流」『改めて見直す壬辰倭乱』、晋州博物館、晋州

米谷均、2000「17世紀の朝日関係における朝鮮被擄人の送還」『四溟堂惟政』、四溟堂記念事業会、ソウル

く変化した。従って、これからは壬辰倭乱を見る観点も変わらなければならない。これに関連して何点か留意すべき点につき提起してみたい。

まず、名称に関する問題である。韓国の場合には‘壬辰倭乱’が主流をなしており、北朝鮮の場合は‘壬辰祖国戦争’という用語を使用しているが、これは学問的用語に祖国という語が入っており、客観的ではない。また、日本では主に‘文禄・慶長の役’を用いているが、‘朝鮮征伐’もしくは‘朝鮮出兵’という表現も使い、批判の対象にもなった。ただし、最近、一部の学者の間では‘朝鮮侵略’と表現している。中国の場合は‘壬辰倭禍’や‘萬曆東征’と表現している。壬辰倭乱という名称は、日本が侵略した事実を道徳的に評価する意味が含まれている。現在もこうした道徳的评价が入っている用語を用いるのかという問題に関しては、冷静な検討が必要である。さらには、韓日歴史共同委員会において共同研究を行うための名称、また、日本史研究者や韓国史研究者が共に使用できる名称の考案が期待される。

従って、これからは韓国側も国家間で展開された国際戦争という認識のもとで、名称について再検討する必要があると考える。これと関連し、柳在城は『韓国民族戦争Ⅲ』で、壬辰倭乱を‘第一次朝日戦争’、丁酉再乱を‘第二次朝日戦争’と呼んでいることは注目に値する¹³⁴。これについて、柳在城は特に説明をしていないが、国家間の戦争という概念を導入して考案したものと思われる。ただ、朝日戦争という表現には明国の参与が排除されていることが問題と考えられる。よって、いったん壬辰倭乱という用語を使用しなければならないが、より適切で客観的な用語を考案することが望ましいだろう。

次に、壬辰倭乱を東アジア三国が行った国際戦争と認識する姿勢が必要である。戦争を朝鮮と日本の戦争と限定してはならず、単純な民族的勝敗を離れて国内外の諸般の問題と相互にリンクして把握し、さらには、国際関係というその時代の具体的な条件と結びつけて把握しなければならない。壬辰倭乱は、過去のある一時期の戦争であったと、過ぎた歴史事実と理解されなくてはならない。戦争史において戦争の勝敗という判断に執着する必要はない。勝利や敗北といった断定よりも戦闘状況や戦績という客観的叙述が必要で、当時の様々な状況と結びつく歴史的なつながりを理解する方向で研究が進められなければならない。

三つ目としては、壬辰倭乱の展開過程に関する総合的で客観的な認識が必要である。戦争関連資料は、その性格上、局部的、もしくは一面的な記述である可能性が大きいので、徹底した史料批判を通じた研究をしなければならない。個別の戦闘状況に関する研究を、文献実証的に研究する段階も克服されなければならないであろう。従来の義兵研究において、しばしば人物・地域別の研究をもとにした誇張や、一族・郷土史学的性格が強調されて、義兵の構成や活動、当時の状況などが客観的に叙述されなかった。一方的な資料だけを根拠にして偏った叙述をする危険性が大きかったのである。従って、これを客観化することによって義兵の実質的な活動や戦略的意義を明らかにし、同時に戦争中の民衆の動態や身分の変化、戦乱後の社会変化相や政治的影響などを新たに究明しなければならない。また、壬辰倭乱は党争などの政争や地理的決定

¹³⁴ 柳在城、1996「第三章 朝日戦争」『韓国民族戦争通史』、国防軍史研究所、ソウル（128－288頁）

論、地政学的理論などから自由になって、事件を総合的に理解し客観的に把握するという認識が必要である。

四つ目として、壬辰倭乱は東アジア三国以外にもポルトガル・琉球および東南アジア軍といった外国人の参戦事実¹³⁵がある程度明らかになっているので、外国人の参戦の事実や意味について究明しなければならない。これに関連し、各国には多くの資料が散在しているが、これらの資料は各国の利害関係に従って記録されている可能性が大きいため、これについての綿密な検討が必要である。よって、これらの資料の客観性を確保するために、韓国・日本・中国の資料が全面的に公開・整理されなければならない、多角的な側面から分析する努力が先行しなければならない。

最後に、今後韓日間で行うべき共同研究課題は多い。その概要を述べれば次の通りである。

まず、壬辰倭乱と東アジア国際情勢に関する問題である。壬辰倭乱が東アジア三国の歴史の中に占める位置は非常に大きいといえる。にもかかわらず、これについての研究はまだ充分でないのが実状である。また、韓国と日本の間の過去に対する認識の隔たりが依然として問題となっている今日、中世期における関係の一つの‘区切り’として、壬辰倭乱が東アジアの国際秩序の全体と個別国家の歴史の変化に及ぼした影響を探求することは実に重要で喫緊の課題といえるであろう。

二つ目としては、朝・日水軍の戦力に関する問題である。この分野では韓日両国の視点においても大きな違いがあるようである。しかし、多くの研究成果にもかかわらず今後この分野で解決すべき課題が少なくないのである。まず、壬辰倭乱における海戦の勝敗要因に関する総合的な比較分析がない中で、いまだに部分的・分散的研究に止まっている点を指摘せざるを得ない。すなわち、壬辰倭乱の海戦全般にわたる朝・日水軍の勝敗の様相を再検討する中で、両国の戦闘体制と戦術運用、戦船や火器の性能、そしてその運用実態などを総合的に分析・評価する作業を行わなければならないと考える。同時に、勝敗の要因を分析するにあたっては、既存の研究成果の中で大きな誤りのあるものを批判して是正する作業も行わなければならないであろう。たとえば、‘李舜臣の戦略戦術と亀甲船による勝利’という壬辰倭乱の海戦の認識がその代表例である。この論理は一部の海戦については該当しても、一般的な海戦とは無関係であるためである。特に、亀甲船の問題点とそれが有する海戦における得失の問題は部分的に研究が行われたものの、今後さらに詳細に研究すべき分野である。

三つ目として、壬辰倭乱期の義兵運動に関する問題である。義兵研究は、戦争史分野を除けば体系的ではない。特に、壬辰倭乱が勃発した16世紀後半の朝鮮社会は、様々な矛盾や葛藤が露呈し、新しい社会を模索していた時期であり、士林系列による各種の制度的改善策にもかかわらず、未だに旧体制の矛盾を是正できずにいた過渡期であった。こうした前提の上に立って、壬辰倭乱期の義兵活動も研究しなければならない。今後、さらなる総合的研究が求められているといえる。

四つ目としては、戦争勃発以降、朝鮮軍の兵力動員体制がどう対応し稼動したのか、また、どう

¹³⁵ 李鉉淙、1974「壬辰倭乱時の琉球・東南亜人の来援」『日本学報』29、韓国日本学会
姜炳求 訳、1999『ポルトガル神父が見た壬辰倭乱初期の韓国』、カモンイス財団・駐韓ポルトガル文化院

機能し再編されていったのかについての研究を具体的に進める必要がある。朝鮮前期の中央軍制である五衛体制がどのように解体して五軍営体制へと移行することになったのか、前期の地方軍制である鎮管体制は壬乱後にどう変化して東伍軍制や令將制の中に吸収されたのか、戦争の推移にともない朝鮮側の対応と動員体制がどのように整備されて変化していったのか、そして、そうした動員体制の再編が、壬乱以後の朝鮮後期の軍事態勢にどのような影響を及ぼしたのか等である。特に、韓日歴史共同研究委員会の目的に関連付けてみるならば、‘壬辰倭乱勃発以降の動員体制の再編’は戦争の推移を扱いながらも、できるだけ朝鮮後期の日本に備えるという軍事的側面を考慮して叙述する必要がある。結局、19世紀の半ばの日本の再侵についての構造的な理解のためには、日本に備えた朝鮮側の国防体制に関する全般的な理解を前提とするからである。こうした点で、壬辰倭乱以後の動員体制の再編が、戦後の日本における国内情勢の変化をはじめとした朝日関係の変化にともなってどのように変化しているのかという研究視野の拡大が求められている。

五つ目として、壬辰倭乱の戦闘地域についての調査研究である。戦争史に関する研究において、基本的な個別の戦闘史の理解には、主要戦闘地の城郭、倭城、兵営施設、戦闘地の地形の特徴などに関する調査が必要であるといえる。ところで、戦闘地域に関する調査研究は相対的に疎かにされていたといえる。従って、これについての正しい理解を基礎とすることで個別の戦闘史に対してより正確に理解することが可能となるであろう。

六つ目としては、降倭、朝鮮被擄人、文化財の略奪などの問題である。壬辰倭乱は、数多くの文化財が焼失するか日本へ流出し、多くの朝鮮の陶工、細工人、農民、漢方医が捕虜として連行された。彼等は、戦後の復興に酷使され、多くの人々がポルトガルや日本商人によって世界各地に売られていった。その数は約10万人に達するほどで、研究者の中にはこのことを指摘して壬辰倭乱を奴隷戦争とも呼んでいる。また、戦争期間中に多くの文化財が破壊・略奪されて日本に流出した。こうした実状に関する具体的な研究を進める必要がある。これは、韓日間の懸案問題といえる教科書問題とも直結するからである。従って、韓日両国の協力の下で日本軍による朝鮮人拉致の実態把握やその後の生活相、送還過程などが具体的に究明されなければならず、流出した文化財の実態把握を通じて戦争期の朝鮮の文化・経済的損失の実状を究明し、現在、日本内の各図書館や博物館に所蔵されている文化財についての研究も進める必要がある。

七つ目としては、壬辰倭乱当時の占領政策と民衆の対応、そして、戦争期における民衆の生活相の変化などの問題である。これまでの研究成果を考察すると、壬辰倭乱による政治・軍事制度上の変化などに関しては研究成果が多いが、社会的側面における研究は微々たるものである。それでも身分制や郷村社会の構造変化については部分的な研究があるが、民衆の生活相については研究が全くない。従って、壬辰倭乱期の日本軍の占領政策とそれいともなう民衆の対応策、戦争によって疲弊した民衆の生活相を具体的に考察する必要がある。

八つ目としては、戦争によって相互間で行われた文化の伝播に関する部分である。これまでは主に壬辰倭乱直後に朝鮮の文物が日本に伝来し、朝鮮文化が日本に及ぼした影響に関する部分に焦点を当てて研究が進められてきたが、その対象は大体において朝鮮性理学(朱子学)、

金属活字と書籍、陶磁器などに集中していた。もちろん、朝鮮性理学の伝来過程、金属活字や書籍の略奪規模と伝達過程、現在の保存実態、その活字や書籍の具体的な活用、影響などがさらに具体的に明らかにする必要がある。特に、陶磁器の場合、主に陶工の連行や日本軍の略奪過程に関しては比較的詳しく明らかにされたが、連行された陶工たちの日本での活動、陶窯の分布や活動の現況、現在までの伝承関係など、今後詳細に究明しなければならない部分が多くある。同時に、戦争中や直後に日本から朝鮮に伝来した鳥銃・刀剣等の武器、天主教、唐辛子などの植物に関する事項も取り上げる必要がある。

このほかにも、戦争の終結・処理問題、戦争期間中の両国内における反戦意識など、多様な分野で具体的・客観的研究を進める必要があるといえる。こうして研究に努力を傾ける時、韓日歴史共同研究委員会の趣旨に合った研究成果が期待でき、さらには韓日間の善隣友好のためにも大きな支えとなるであろう。

< 壬辰倭乱(文禄・慶長の役) 関連論著目録 >

< 著書 >

1. 崔南善、1931 『壬辰乱』、東明社、ソウル
2. 李允宰、1946 『聖雄 李舜臣』、通文館、ソウル
3. 李殷相、1946 『李忠武公一代記』、国学図書出版部、ソウル
4. 姜興秀、1948 『壬辰倭乱と丙子胡乱』、文運堂、ソウル
5. 李芬／朴泰遠 訳、1948 『李忠武公行録』、乙酉文化社、ソウル
6. 震檀学会 編、1950 『李忠武公』、同研社、ソウル
7. 権泰益、1951 『壬辰倭乱』、啓蒙社、ソウル
8. 李忠武公記念事業会 編、1951 『民族の太陽』、李忠武公記念事業会、釜山
9. 震檀学会 編、1955 『忠武公読本』、忠武公記念事業会、ソウル
10. 梁炯燮、1957 『1592－1598 壬辰祖国戦争における人民義兵闘争』、社会科学院歴史研究所、平壤
11. 李忠武公記念事業会全南支部 編、1958 『忠武公遺物遺蹟図鑑』、民族文化社
12. 李殷相 訳、1960 『国訳註解李忠武公全書(上・下)』、忠武会
13. 文教部、1960 『李忠武公乱中日記』、三和印刷株式会社、ソウル
14. 朴泰遠、1960 『壬辰祖国戦争』、国立文学芸術書籍出版社
15. 尹錫源、1963 『郭再祐指揮下の嶺南人民の闘争』、朝鮮労働党出版社、平壤
16. 尹錫源、1963 『壬辰祖国戦争』、朝鮮労働党出版社、平壤
17. 趙仁福、1964 『李舜臣戦史研究』、鳴洋社、ソウル
18. 崔吉城、1964 『壬辰祖国戦争期の我が水軍の闘争』、社会科学出版社
19. 李殷直、1966 『朝鮮名将伝』、新興書店
20. 李炯錫、1967 『壬辰戦乱史』(上・下)、壬辰戦乱刊行委員会、ソウル
21. 李殷相 訳、1968『乱中日記』、玄岩社、ソウル
22. 南廣祐、1969 『朝鮮漢字音研究—壬辰倭乱前の現実漢字音を中心に—』、東亜出版社、ソウル
23. 李殷相、1969 『聖雄李舜臣』、民族文化協会附設 日の光社、ソウル
24. 金義煥、1972 『人間李舜臣伝』、ヨンムン出版社
25. 東亜文化研究所 編、1972 『壬辰乱史—国外資料』、ソウル大出版部、ソウル
26. 成東鎬 編、1972 『忠武公逸話』、瑞文堂、ソウル
27. 李爽浩 訳、1973 『乱中日記』、集文堂、ソウル
28. 趙成都 訳、1973 『壬辰状草』、同元社、ソウル
29. 李殷相、1974 『忠武公の生涯と思想』、三星文化財団
30. 李炯錫、1974 『壬辰戦乱史』(上・中・下)、新現実社、ソウル
31. 崔永禧、1974 『壬辰倭乱』、世宗大王記念事業会、ソウル

32. 李殷相、1975 『聖雄李舜臣』、三中堂、ソウル
33. 李殷相 訳、1975 『乱中日記』、三中堂、ソウル
34. 崔永禧、1975 『壬辰倭乱中の社会動態』、韓国研究院、ソウル
35. 趙成都、1976 『忠武公李舜臣』、同元社、ソウル
36. 金泰俊、1977 『壬辰倭乱と朝鮮文化の東漸』、韓国研究院、ソウル
37. 李殷相 訳、1977 『乱中日記』、李忠武公文献編纂委員会、ソウル
38. 李鉉淙 訳、1977 『趙靖先生文集』、趙靖先生文集刊行委員会
39. 蘇在英、1977 『壬辰録』、蜚雪出版社、ソウル
40. 韓国軍事研究室、1977 『韓国軍制史』、陸軍本部
41. 金在瑾、1978 『亀甲船の神話』、正宇社、ソウル
42. 姜舞鶴、1979 『忠武公兵法』、家庭文庫社、ソウル
43. 蘇在英、1980 『壬丙洋乱と文学意識』、韓国研究院、ソウル
44. 姜熙英、1981 『姜弘立將軍一密旨にこめられた民族の秘事一』、野実社、ソウル
45. 李進熙、1982 『韓国と日本文化』、乙酉文化社、ソウル
46. 趙浚来、1982 『壬辰義兵将金千鎰研究』、学文社、ソウル
47. 李在範、1983 『元均正論』、啓明社、ソウル
48. 李榮煥、1984 『李英男將軍伝記』、鎮川文化院、大田
49. 亜細亜文化社、1984 『壬辰倭乱関係文献叢刊』1-3、亜細亜文化社、ソウル
50. 朴性植、1986 『壬辰倭乱の研究』、嶺南大 博士学位論文
51. 李俊杰、1986 『朝鮮時代の日本との書籍交流研究』、弘益齋、ソウル
52. 林哲鎬、1986 『壬辰録研究』、正音社、ソウル
53. 趙成都、1986 『制勝堂と李忠武公』、芸文社、ソウル
54. 国際韓国学会、1987 『シルクロードと韓国文学』、松の木、ソウル
55. 朴哲、1987 『セスペデス』、西江大学校出版部、ソウル
56. 徐仁漢、1987 『壬辰倭乱史』、戦史編纂委員会、ソウル
57. 海南文化院、1987 『鳴梁大捷の再照明』、海南文化院、海南
58. 南原文化院、1989 『丁酉再乱南原城の戦い』、南原文化院、南原
59. 朴哲鎬、1989 『説話と民衆の歴史意識－壬辰倭乱説話を中心に－』、集文堂、ソウル
60. 鄭光洙、1989 『謹んで敵を打ち破りし旨申し上げます』、世界精神社、ソウル
61. 河宇鳳、1989 『朝鮮後期実学者の日本観研究』、一志社、ソウル
62. 嶺南大 民族文化研究所、1990 『慶北義兵史』、慶尚北道、大邱
63. 韋旭全、1990 『抗倭演義(壬辰録)研究』、亜細亜文化社、ソウル
64. 全北郷土文化研究会編、1990 『全北義兵史』(上・下)、全北郷土文化研究会、全州
65. 全羅南道壬乱史料編纂委員会、1990・92 『湖南地方壬辰倭乱史料集』I-IV、全羅南道、
光州
66. 孫承喆、1991 『近世韓日関係史研究』、理論と実践、ソウル

67. 靈光郷土文化研究会、1991 『靈光壬乱史料集』、靈光郷土文化研究会、光州
68. 金台俊ほか、1992 『壬辰倭乱と韓国文学』、民音社、ソウル
69. 南天祐、1992 『長刀を佩き戎楼に一人座して—李舜臣の智略と死についての疑問—』、修文書館、ソウル
70. 木浦大博物館、1992 『壬辰・丁酉倭乱と珍島』、木浦市
71. 文榮龜、1992 『全羅左水営研究』、大韓建設振興会
72. 李元勝、1992 『柳成龍の軍事分野業績の再照明』、清文閣
73. 壬乱功臣崇慕会 編、1992 『壬乱功臣遺史誌』
74. 崔碩男、1992 『救国の名将李舜臣(上・下)』、教学社
75. 黄 汎江 1992 『壬辰倭乱と実記文学』、一志社
76. 金弘、1993 『壬辰倭乱の軍事史的研究』、慶北大 博士学位論文
77. 李錫麟、1993 『壬辰義兵將趙憲研究』、新旧文化社
78. 梁銀容、1993 『壬辰倭乱と仏教義僧軍』、経書院
79. 崔孝軾、1993 『慶州府の壬辰抗争史』、慶州市文化院、慶州
80. 国立大邱博物館、1994 『嶺南の名儒と壬辰倭乱』、国立大邱博物館、大邱
81. 徐弼亮、1994 『壬申倭乱—それはそうではなかった—』、瑞文堂、ソウル
82. 梁在淑、1994 『再び記す壬辰倭乱』I・II、高麗苑、ソウル
83. 金文吉、1995 『壬辰倭乱は文化戦争である』、慧眼、ソウル
84. 小川晴久(河宇鳳 訳)、1995 『韓国実学と日本』、ハンウル、ソウル
85. 李採衍、1995 『壬辰倭乱捕虜実記研究』、博而精出版社、ソウル
86. 金鍾洙、1996 『朝鮮後期訓練都監の設立と運営』、ソウル大 博士学位論文
87. 李在範、1996 『元均のための弁明—記録を残さなかった者の悲哀』、学民社、ソウル
88. 林哲鎬、1996 『壬辰録異本研究 I -IV』、全州大学校出版部
89. 趙重和、1996 『再び記す壬辰倭乱史』、学民社
90. 車文燮、1996 『朝鮮時代軍事関係研究』、檀大出版部
91. 崔斗煥 訳、1996 『新訳 乱中日記』、学民社
92. 順天大学校博物館、1997 『順天劍丹山城と倭城』、順天市
93. 韓国歴史研究会、1997 『韓国歴史の中の戦争』、青年社
94. 郭鎬濟、1998 『壬辰倭乱期の湖西義兵研究』、忠南大 博士学位論文
95. 李照永、1998 『李舜臣と王朝実録』、大成文化社
96. 朴哲暁、李相勲、1998 『忠武公李舜臣』、文化観光部 大韓出版文化協会
97. 韓日関係史学会、1998 『韓日両国の相互認識』、国学資料院
98. 国立晋州博物館、1999 『戦って死ぬのは容易だが、道を貸すのは困難だ—史料で見る壬辰倭乱』、慧眼
99. 崔永禧ほか、1999 『新たに見る壬辰倭乱』、晋州博物館
100. 韓明基、1999 『壬辰倭乱と韓中関係』、歴史批評社

101. 四溟堂記念事業会、2000 『四溟堂惟政—その人間と思想と活動』、知識産業社
102. 張庚男、2000 『壬辰倭乱の文学的形象化』、亜細亜文化社
103. 許容起、2000 『忠武公金時敏將軍史料集』、図書出版韓国文化
104. 金康植、2001 『壬辰倭乱と慶尚右道の義兵運動』、慧眼
105. 崔文正、2001 『壬辰録研究』、博而精
106. 金州植・李敏雄・鄭鎮述編、2002 『朝鮮時代の水軍関連史料集 I - V』、海軍士官学校
107. 李章熙・朴哲暁ほか、2003 『望菴邊以中研究』、鳳岩書院
108. 崔官、2003 『日本と壬辰倭乱』、高麗大学校出版部

<論文>

1. 鄭泰民、1948 「壬辰乱中の農民蜂起」『新天地』3-10
2. 成海、1949 「朝鮮名将論(李舜臣將軍篇; 上)」『歴史諸問題』6
3. 成海、1949 「朝鮮名将論(李舜臣將軍篇; 中)」『歴史諸問題』7
4. 成海、1949 「朝鮮名将論(李舜臣將軍篇; 下)」『歴史諸問題』8
5. 韓汝功、1952 「壬辰乱の原因に関する検討—豊臣秀吉の戦争挑発原因について」『歴史学報』1、歴史学会
6. 金庠基、1953 「東西思想から見た忠武公の偉勲」『李忠武公350周年記念論叢』、同研社
7. 柳洪烈、1953 「李舜臣將軍の生涯」『李忠武公』、同研社
8. 李秉岐、1953 「忠武公の文学」『李忠武公』、同研社
9. 李丙燾、1953 「壬辰乱時の降倭と金忠善」『李忠武公350周年記念論叢』
10. 李弘植、1954 「壬辰乱と古典流失」『韓国古文化論考』
11. リ・チュンソン、1955 「李舜臣將軍の生涯と活動」『歴史科学』
12. 宋晞、1955 「韓国抗日名将李舜臣」『中韓文化論集』
13. 崔永禧、1957 「壬辰・丁酉乱時の沿岸民の動態」『史叢』2、高麗大史学会、ソウル
14. 金永上、1958 「世宗大王と李忠武公の誕生地」『郷土ソウル』3、ソウル市史編纂委員会、ソウル
15. 李殷相、1958 「忠武公とその詩文」『論文集』1、青丘大
16. 朴種和、1959 「四溟大師と壬辰倭乱」『白性郁博士頌壽記念仏教学論文集』
17. 李鉉淙、1961 「明使接待考」『郷土ソウル』12、ソウル市史編纂委員会、ソウル
18. 車文燮、1961 「壬辰以降の良役と均役法の成立(上・下)」『史学研究』10・11、韓国史学会、ソウル
19. 金錫禧、1962 「壬辰倭乱の義兵運動に関する一考」『郷土ソウル』15、ソウル市史編纂委員会、ソウル
20. 李崇寧、1962 「壬辰倭乱と民間人の被害について」『歴史学報』17・18合併号、歴史学会、ソウル
21. 李鉉淙、1963 「壬辰倭乱とソウル」『郷土ソウル』18、ソウル市史編纂委員会、ソウル

22. 禹貞相、1963 「南北漢山城義僧防番銭について」『壬辰倭乱と仏教義僧軍』経書院、ソウル
23. 禹貞相、1963 「南北漢山城義僧防番銭について」『仏教学報』1東国大仏教文化研究、ソウル
24. 丁仲煥、1963 「日本の記録に見る壬辰乱—釜山関係史料を中心に—」『郷土釜山』3、釜山市史編纂委員会、釜山
25. 金良善、1964 「壬辰倭乱従軍神父セスペデスの来韓活動とその影響」『史学研究』18、韓国史学会、ソウル
26. 金龍国、1964 「壬辰倭乱中のソウル修復戦と防衛計画」『郷土ソウル』22、ソウル市史編纂委員会、ソウル
27. 朴容玉、1964 「丁卯乱朝鮮被擄人刷贖還考」『史学研究』18、韓国史学会、ソウル
28. 崔永禧、1964 「壬辰倭乱中の対明事大について」『史学研究』18、韓国史学会、ソウル
29. 権相老、1965 「四溟堂—軍服に替えた袈裟—」『韓国の人間像』2、新丘文化社、ソウル
30. 李載浩、1965 「柳成龍(1542—1607)—倭乱を克服した名相—」『人物韓国史』3、博友社、ソウル
31. 張徳順、1965 「古典文学に表われた対日感情」『東亜文化』4、ソウル大学校出版部、ソウル
32. 車文燮、1965 「申位—弾琴臺に注いだ血」『韓国の人間像』5、新丘文化社、ソウル
33. 崔碩男、1965 「李舜臣—民族の聖雄—」『人物韓国史』3、博友社、ソウル
34. 崔永禧、1965 「柳成龍—戦乱における支柱—」『韓国の人間像』1、新丘文化社、ソウル
35. 崔永禧、1965 「李舜臣—民族救援の聖雄—」『韓国の人間像』2、新丘文化社、ソウル
36. 金斗鍾、1966 「壬辰乱後の活字印本—実録字と訓練都監字」『震檀学報』29・30合併号、震檀学会、ソウル
37. 李丙燾、1966 「漢陽城郭考—特に朝鮮前期(壬乱以前)を中心に—」『郷土ソウル』29、ソウル市史編纂委員会、ソウル
38. 鄭夏明、1966 「柳成龍の軍事観の一斑—その山城説—」『陸士論文集』4、陸軍士官学校、ソウル
39. 李基平、1967 「李忠武公研究」『論文集』4、公州教育大学、公州
40. 李ヨレ、1967 「壬辰倭乱の経済史的意義」『経商論集』3、建国大経商学会、ソウル
41. 李載浩、1967 「壬辰義兵の一考察—官軍と明軍との関係を中心に—」『歴史学報』35・36合併号、歴史学会、ソウル
42. 金龍国、1968 「壬辰倭乱後の亀船の変遷過程」『学術院論文集』7、学術院、ソウル
43. 李章熙、1968 「壬辰倭乱中の民間叛乱について」『郷土ソウル』32、ソウル市史編纂委員会、ソウル
44. 丁淳睦、1968 「李退溪の思想が近世日本の教育に及ぼした影響」『中央大師大学報』4、ソウル

45. 柳承宙、1969 「朝鮮後期軍需鉦工業の発展—鳥銃問題を中心に—」『史学志』3、檀国大史学会、ソウル
46. 李章熙、1969 「壬乱海西義兵に関する一考察—延安大捷を中心に—」『史叢』14、高麗大史学会、ソウル
47. 李章熙、1969 「壬辰倭乱僧軍考」『李弘稷博士華甲記念韓国史論叢』、刊行委員会、ソウル
48. 金聖泰、1970 「李舜臣將軍の性格研究」『行動科学研究』1、高麗大行動科学研究所、ソウル
49. 金日基、1970 「閑山大捷とその影響」『論文集』2、三陟農業専門学校、三陟
50. 丁仲煥、1970 「壬辰倭乱と釜山史蹟—市民の日制定に臨み—」『朴元杓先生華甲記念釜山史研究論叢』、釜山
51. 崔槿默、1970 「壬乱時の湖西義兵について」『論文集』9、人文社会科学編、忠南大、大田
52. 金潤坤、1971 「壬辰乱勃発直前の地方郡県の実態—丹陽郡と彦陽県の場合—」『惠庵柳洪烈博士華甲記念論叢』、惠庵柳洪烈博士華甲記念論叢刊行委員会
53. 金在瑾、1971 「壬辰倭乱期の軍船」『朝鮮王朝軍船研究』、一潮閣、ソウル
54. 李章熙、1971 「壬乱中の糧餉考—明兵の軍糧調達を中心に—」『史叢』15・16合併号、高麗大史学会、ソウル
55. 李章熙、1971 「壬乱中の投降倭兵について」『韓国史研究』6、韓国史研究会、ソウル
56. 金錫禧、1972 「壬辰乱の義兵に関する再考察」『論文集』13、釜山大、釜山
57. 宋正炫、1972 「壬辰倭乱と湖南義兵」『歴史学研究』4、全南大史学会、光州
58. 李章熙、1972 「壬乱前の西北境界政策」『白山学報』12、白山学会、ソウル
59. 琴章泰、1973 「忠節精神—忠武公李舜臣將軍を中心に—」『斯文論叢』1、斯文学会
60. 吳圭煥、1973 「東西洋の二大提督—忠武公とネルソン—」『学術研究造成費による研究報告書(人文科学)』4—15、文教部、ソウル
61. 李乙浩、1973 「丁酉避乱記」『湖南文化研究』5、全南大湖南文化研究所、光州
62. 崔書勉、1973 「壬辰倭乱の人質—‘織田じゅりあ’に関する史的考察—」『民族文化論叢(鷺山李殷相博士古希記念論文集)』
63. 許善道、1973 「‘鎮管体制復旧論’研究」『国民大学論文集』5、国民大学校、ソウル
64. 許善道、1973 「制勝方略研究(上)—壬辰倭乱直前の防衛体制の実相—」『震檀学報』36、震檀学会、ソウル
65. 黄夏鉦、1973 「壬辰倭乱以降の大同および均役の財政史的研究」、漢陽大修士学位論文、ソウル
66. 金在瑾、1974 「龜船の造船学的考察」『学術院論文集』13、大韓民国学術院、ソウル
67. 李鉦淙、1974 「壬辰倭乱時の琉球・東南亜人の来援」『日本学報』2
68. 崔槿默、1974 「壬辰倭乱時の湖西地方の民間叛乱」『百濟研究』5、忠南大百濟研究所、大田

69. 許善道、1974 「制勝方略研究(下)―壬辰倭乱直前の防衛体制の実相」『震檀学報』37、震檀学会、ソウル
70. 洪淳昶、1974 「朝鮮朝 官人国家の変質過程(1)―その序論的考察(壬辰倭乱前の国内政治状況)―」『嶺南史学』3、嶺南大史学会、慶山
71. 権重憲、1975 「壬辰倭乱を中心とした三国(韓・中・日)の外交関係」慶熙大修士論文、ソウル
72. 金泰俊、1975 「日本の新儒学成立と朝鮮学者―壬乱前後の朝鮮文化の対日影響を中心に―」『明大論文集』8、明知大学校、ソウル
73. 趙啓績、1975 「壬辰倭乱期の身分向上に関する小考」『東亜論叢』12、人文科学編、東亜大
74. 崔韶子、1975 「清廷における昭顯世子(1637-1645)」『全海宗博士華甲記念史学論叢』、一潮閣
75. 金在瑾、1976 「板屋船考」『韓国史論』3、韓国史学会、ソウル
76. 劉九成、1976 「壬乱時の明兵の来援考」『史叢』20、高麗大史学会、ソウル
77. 李東俊、1976 「重峯趙憲の歴史意識と国難対策」『同大論叢』6、東徳女子大学校、ソウル
78. 李章熙、1976 「壬辰倭乱」『韓国史論』4(朝鮮後期編)、国史編纂委員会、ソウル
79. 李謙周、1977 「壬辰倭乱と軍事制度の確立」『韓国軍制史』(近世朝鮮後期編)、陸軍本部、ソウル
80. 崔韶子、1977 「壬辰乱時の明の派兵についての論考」『東洋史学研究』11
81. 李鉉淙、1978 「民族発展を脅かした国難」『道』5、総力安保中央協議会
82. 崔韶子、1978 「壬辰乱時の朝鮮支配層の対明意識―内部の問題から見た―」『考古美術』136-137
83. 金東旭、1979 「壬乱前後期の服飾構造―最近出土した遺衣を中心に―」『東方学誌』22、延世大国学研究院、ソウル
84. 朴恵一、1979 「李舜臣亀船の鉄装甲と李朝鉄甲の現在の原型との対比」『韓国科学史学会誌』1-1、韓国科学史学会、ソウル
85. 車文燮、1979 「宣祖朝の訓練都監」『史学志』4、檀国大史学会、ソウル
86. 黄夏鉉、1979 「壬辰倭乱と国家財政の破綻」『経済研究』1、漢陽大経済研究所、ソウル
87. 朴吉雄、1980 「忠武公精神の考察―孝を中心に―」『論文集』16、全州教育大学、全州
88. 李泰鎮、1980 「壬辰倭乱に対する理解におけるいくつかの問題」『軍史』1、戦史編纂委員会、ソウル
89. 金鎔坤、1980 「朝鮮前期の軍糧米確保と運送―壬乱当時を中心に―」『史学研究』32、韓国史学会、ソウル
90. 金頭吉、1981 「壬辰倭乱と義兵将趙熊」『湖西文化研究』1、忠北大湖西文化研究、清州
91. 羅鐘宇、1981 「李舜臣將軍の戦略戦術」『全北史学』5、全北大史学会、全州
92. 柳承宙、1981 「朝鮮前期軍需工業に関する一研究―壬乱中の武器製造実態を中心に」

『史学研究』32

93. 柳承宙、1981 「朝鮮後期軍需工業に関する一研究—軍営門の火薬製造実態を中心に」
『軍史』3、戦史編纂委員会、ソウル
94. 李載浩、1981 「壬乱水軍と李雲龍將軍」『軍史』2、戦史編纂委員会、ソウル
95. 李貞一、1981 「元均論」『歴史学報』89、歴史学会、ソウル
96. 丁仲煥、1981 「壬辰倭乱時の益山地域戦闘」『軍史』2、国防部軍史編纂委員会、ソウル
97. 車勇杰、1981 「朝鮮後期の関防施設の変化過程—壬辰倭乱前後の関防施設に関するいくつかの問題—」『韓国史論』9、国史編纂委員会、ソウル
98. 崔永禧、1981 「壬乱義兵の性格」『軍史』2、戦史編纂委員会、ソウル
99. 崔七鎬、1981 「李舜臣將軍の戦略構想と作戦結果」『軍事』2、戦史編纂委員会、ソウル
100. 許善道、1981 「壬辰倭乱における李忠武公の勝捷—その戦略的・戦術的意義を中心に—」『湖南文化研究』1、国民大学校韓国学研究所、ソウル
101. W. J. Boot、1981 「退溪学と日本」『退溪学報』31、退溪学研究院
102. 甘成海、1982 「壬乱初期尚州戦闘と金宗武」『軍史』5、戦史編纂委員会、ソウル
103. 姜英哲、1982 「壬辰倭乱と元均」『史学研究』35、韓国史学会、ソウル
104. 金鎮鳳、1982 「壬辰乱期の湖西地方の義兵活動と地方士民の動態に関する研究—趙憲の義兵活動を中心に—」『史学研究』34、韓国史学会、ソウル
105. 羅鐘宇、1982 「壬辰倭乱の歴史的背景」『郷土文化』7、郷土文化開発協議会
106. 朴炳柱、1982 「亀船の建造場所について—雙鳳船所を中心に—」『軍史』5、戦史編纂委員会、ソウル
107. 朴性植、1982 「癸巳晋州城戦闘三壮士攷」『大邱史学』20・21合併号、大邱史学会、大邱
108. 朴性植、1982 「癸巳晋州城戦闘小考」『慶北史学』4、慶北大史学科、大邱
109. 朴恵一、1982 「李舜臣亀船の鉄装甲についての留保的註釈」『韓国科学史学会誌』4-1、韓国科学史学会、ソウル
110. 宋正炫、1982 「壬辰倭乱の湖南義兵活動—初期義兵を中心に—」『郷土文化』7、郷土文化開発協議会
111. 李進熙、1982 「壬辰倭乱と戦後の韓日関係」『日本の教科書と韓国史の歪曲』、民知社
112. 丁奎福・高憲植、1982 「山城日記の文献学的研究」『教育論叢』12、高麗大教育大学院、ソウル
113. 金玉姫、1983 「壬乱時に連行された朝鮮女性の日本での殉教と信仰生活」『史学研究』36、韓国史学会、ソウル
114. 金鎮鳳・車勇杰・梁起錫、1983 「朝鮮時代軍役資源の変動についての研究; 湖西地方の場合を中心に」『湖西文化研究』3、忠北大湖西文化研究、清州
115. 金成基、1983 「韓国軍談小説の分析研究—壬辰録と朴氏夫人伝を対象に—」『語文学』2、国民大学校語文学研究所、ソウル
116. 李熙煥、1983 「丁酉再乱時の南原城戦闘について」『全羅史学』7、全北大史学会、全州

117. 林哲鎬、1983 「李如松説話研究; 壬乱説話考2」『国語国文学』90、国語国文学会
118. 文璇奎、1983 「黄進—壬辰倭乱の名将」『全北人物誌』上、全北愛郷運動本部
119. 宋正炫、1983 「壬辰倭乱における湖南義兵」『歴史学研究』11、全南大史学会、光州
120. 李泰鎭、1983 「壬辰倭乱克服の社会的動力—士林の義兵活動基底を中心に—」『韓国史学』5、韓国精神文化研究院歴史研究室、城南
121. 林秉燦、1983 「李英男—壬辰倭乱の水軍忠将」『全北人物誌』下、全北愛郷運動本部
122. 林哲鎬、1983 「金徳齡説話研究—壬辰説話考—」『韓国言語文学』22、韓国言語文学会
123. 趙炳喜、1983 「宋象賢—壬辰倭乱の殉節功臣—」『全北人物誌』上、全北愛郷運動本部
124. 趙奭来、1983 「壬乱関係伝説に表われた民衆意識—晋州地域伝説を中心に—」『晋州文化』4、晋州教育大学晋州文化圏研究所、晋州
125. 許善道、1983 「壬辰倭乱の克服と嶺右義兵—その戦略的意義を中心に—」『晋州文化』4、晋州教育大学晋州文化圏研究所、晋州
126. 文守弘、1984 「壬乱期の慶尚左道地方の義兵活動」『素軒南都泳博士華甲記念史学論叢』、同刊行委員会、ソウル
127. 朴哲鎬、1984 「四溟堂説話研究」『韓国言語文学』23、韓国言語文学会
128. 許善道、1984 「壬辰倭乱に対する新しい認識—勝敗の実状を中心に—」『韓国学』31、韓国学研究所、ソウル
129. 洪性徳、1984 「丁酉倭乱以降の明・日停戦交渉と朝・明関係」『全北史学』8、全北大史学会、全州
130. 金一相、1985 「鳴梁海戦の戦術的考察」『国防研究』28、国防大学院安保問題研究所、ソウル
131. 金泰俊、1985 「壬辰倭乱を通じた平和の精神史」『東洋学』15、檀国大東洋学研究所、ソウル
132. 金鉉丘、1985 「朝鮮後期統制使に関する研究—その職任を中心に—」『釜大史学』9、釜山大
133. 柳承宙、1985 「倭乱後の明軍の留兵論と撤兵論」『千寛宇先生還暦記念史学論叢』、正音文化社、ソウル
134. 李錫麟、1985 「壬辰初期義旅の構成および性分分析; 重峯義旅を中心に」『湖西文化研究』5、忠北大湖西文化研究、清州
135. 朴恵一、1985 「李舜臣の亀船(1592)の鉄装甲と慶尚左水使の鱗甲記録(1748)に対する註釈」『韓国科学史学会誌』7-1、韓国科学史学会、ソウル
136. 李樹鳳、1985 「盤谷の乱中日記攷 I」『湖西文化研究』5、忠北大湖西文化研究所、清州
137. 李載浩、1985 「宣祖修正実録記事の疑点に対する分析—特に李栗谷の‘十万養兵論’と柳西厓の義兵不可論について—」『大東文化研究』19、成均館大 大東文化研究院、ソウル
138. 趙浚来、1985 「壬辰倭乱期の全羅道義兵の性格—壬辰年の嶺南地域における活動相を

中心に『史郷』2、公州師範大学歴史教育科、公州

139. 陳捷先、1985 「壬辰倭乱以降の明朝」『東洋学』15、檀国大東洋学研究所、ソウル
140. 崔永禧、1985 「壬辰倭乱期の民衆と義兵」『東洋学』15、檀国大東洋学研究所、ソウル
141. 許善道、1985 「壬辰倭乱論一新しく正しい認識」『東洋学』15、檀国大東洋学研究所、ソウル
142. 許善道、1985 「壬辰倭乱論一新しく正しい認識」『千寛宇先生還暦記念史学論叢』、正音文化社、ソウル
143. 金鉉龍、1986 「壬乱期の構成説話考；於于野譚説話を中心に」『人文科学論叢』18、建国大人文学研究所、ソウル
144. 柳在春、1986 「壬乱後の韓日国交再開と国書改作に関する研究」『江原史学』2、江原大、春川
145. 李康七、1986 「韓国の火砲—国防科学技術指定文化財を中心に」『文化財』19、文化財管理局、ソウル
146. 李敏昊、1986 「江戸時代の退溪学小考」『史学志』20、檀国大史学会、ソウル
147. 李泰鎮、1986 「16世紀の東アジアの歴史的状況と文化」『韓国社会史研究』、知識産業社、ソウル
148. 趙浚来、1986 「壬乱時の海戦と興陽水軍」『南島文化研究』2、順天大学南島文化研究所、順天
149. 金東旭、1987 「壬乱・丙乱前後の安東金氏一括遺衣」『忠北大学校博物館所蔵出土遺衣および近代服飾論考』、忠北大学校博物館、大田
150. 羅鐘宇、1987 「壬乱義兵と長城南門倡義」『郷土文化研究』4、円光大郷土文化研究所、裡里
151. 閔德基、1987 「壬辰倭乱以降の朝・日講和交渉と対馬島(1)—交隣秩序の再編を中心に」『史学研究』39、韓国史学会、ソウル
152. 朴京夏、1987 「壬乱直後の郷約に関する研究—高坪洞洞契を中心に」『中央史論』5、中央大史学研究会、ソウル
153. 白スギル、1987 「『懲毖録』の史料価値について」『歴史科学』1987-2、科学百科辞典出版社
154. 孫寶基、1987 「壬辰倭乱と日本の活字印刷術」『愛山学報』5、愛山学会、ソウル
155. 孫承喆、1987 『近世日韓関係史』江原大学校出版部、春川
156. 呂恩暲、1987 「朝鮮後期山城の僧軍摠攝」『大丘史学』32、大丘史学会、大丘
157. 柳承宙、1987 「晋州城の義妓論介考」『崔永禧先生華甲記念韓国史学論叢』、探求堂、ソウル
158. 李章熙、1987 「倭乱と胡乱」『韓国史研究入門』、知識産業社、ソウル
159. 李載浩、1987 「壬辰倭乱と柳西厓の自主国防策」『歴史教育論集』11、慶北大歴史教育学会

160. 李貞一、1987 「全羅右水使李億祺考」『蔚山史学』1、蔚山大学校史学科
161. 張学根、1987 「朝鮮時代の海洋防衛史研究」、海軍士官学校
162. 鄭震英、1987 「壬乱前後尚州地方士族の動向」『民族文化論叢』8、嶺南大民族文化研究所
163. 高錫珪、1988 「鄭仁弘の義兵活動と山林基盤」『韓国学報』51、一志社、ソウル
164. 具徳会、1988 「宣祖代後半(1594-1608)における政治体制の再編と政局の動向」『韓国史論』20、ソウル大國史学科、ソウル
165. 金甲周、1988 「南北漢山城義僧番銭の総合的考察」『仏教学報』25、東国大仏教文化研究院
166. 李錫麟、1988 「趙憲を中心とした壬乱初期の義兵分析」『又仁金龍徳博士停年記念史学論叢』、同刊行委員会、ソウル
167. 孫承喆、1988 「朝鮮朝における事大交隣政策の成立とその性格—朝鮮朝対外政策史研究試論」『溪村閔丙河教授停年記念史学論叢』
168. 孫鍾聲、1988 「壬辰倭乱時の分朝に関する小考」『溪村閔丙河教授停年記念史学論叢』、同刊行委員会、ソウル
169. 宋俊浩、1988 「晋州において再確認される朝鮮朝社会の持続性—壬乱を経た晋州社会の序言として」『宗教・人間・社会—ヒューマニティの回復のために』、徐義必先生華甲記念論文集刊行委員会
170. 楊萬鼎、1988 「海翁金弘遠の生涯と倡義活動」『全羅文化研究』3、全北郷土文化研究会
171. 鄭弘俊、1988 「壬辰倭乱直後の統治体制の整備過程—性理学的秩序の強化を中心に」『奎章閣』11、奎章閣
172. 趙楨基、1988 「西厓柳成龍の軍政思想(Ⅰ)」『釜山史学』14・15、釜山大
173. 許善道、1988 「壬乱初期の東萊(釜山)における殉節とその崇揚事業について(上)」『韓国学論叢』10、国民大韓国学研究所
174. 南都泳、1989 「壬辰倭乱時の光海君の活動に関する研究」『国史館論叢』9、国史編纂委員会
175. 李章熙ほか、1989 「壬辰倭乱時の泗川戦闘とその戦跡地」『軍史』19、国防軍史研究所
176. 閔德基、1989 「壬辰倭乱以後の朝・日講和交渉と対馬島(2)—交隣秩序の再編を中心に」『史学研究』40、韓国史学会、ソウル
177. 尹用出、1989 「壬辰倭乱期の軍役制の動揺と改編」『釜大史学』13、釜山大史学科
178. 李敏昊、1989 「光海君朝の対日関係考察」『龍巖 車文燮教授華甲記念論叢 朝鮮時代史研究』、記念論叢刊行委員会
179. 田炳喆、1989 「壬辰倭乱期の納粟政策」『龍巖 車文燮教授華甲記念論叢 朝鮮時代史研究』、記念論叢刊行委員会
180. 趙浚来、1989 「壬乱期の湖南義兵と義兵指導層の性格」『北岳史論』1、国民大國史学科
181. 趙楨基、1989 「西厓柳成龍の軍政思想(Ⅱ)—戦時国用確保議を中心に」『論文集』11—

7、昌原大学

182. 趙楨基、1989 「西厓柳成龍の城墩論」『龍巖 車文燮教授華甲記念論叢 朝鮮時代史研究』、記念論叢刊行委員会
183. 河泰奎、1989 「壬乱期における全北人の倡義活動—湖南節義録の分析を中心に」『全羅文化論叢』3、全北大全羅文化研究所
184. 金圻彬、1990 「睡隱姜沆研究—愛国思想と文学世界」『民族文化』13、民族文化推進黨
185. 金昊鍾、1990 「西厓柳成龍の国防思想」『退溪学』2、退溪学研究所
186. 方相鉉、1990 「朝鮮後期の水軍統制使研究—水軍統制營の設置背景を中心に」『国史館論叢』17、国史編纂委員会
187. 孫鍾聲、1990 「壬辰倭乱時の対明外交—請兵外交を中心に」『国史館論叢』14
188. 李ヨンギル、1990 「義妓論介の史蹟考察」『晋州文化』4、晋州文化院
189. 崔韶子、1990 「明末の中国的世界秩序の変化—壬辰・丁酉倭禍を中心に」『明末清初社会の照明』
190. 河泰奎、1990 「壬乱における熊峙戦の位相について—湖南防禦と関連して」『全羅文化論叢』4、全北大全羅文化研究所
191. 楨浩史、1991 「壬辰乱と李舜臣の戦略戦術」『国際海洋力シンポジウム発表文集』、海洋研究所
192. 姜永五、1991 「李舜臣提督の戦略的ジレンマと現代的関連性」『国際海洋力シンポジウム発表文集』、海軍軍事研究所
193. 姜泳勲、1991 「李忠武公の軍法運用—乱中日記を中心に」『許善道教授華甲記念忠武公李舜臣研究論叢』
194. 金錫禧、1991 「壬辰倭乱期の救恤に関する一考」『日本研究』9、釜山大日本問題研究所
195. 金一相、1991 「壬辰倭乱と李舜臣の戦略」『趙成都教授華甲記念忠武公李舜臣研究論叢』、海軍士官学校博物館
196. 金一相、1991 「壬辰倭乱と李舜臣の戦略」『許善道教授華甲記念忠武公李舜臣研究論叢』
197. 金秋鵬、1991 「壬辰倭乱時の中国の航海科学と軍船」『国際海洋力シンポジウム発表文集』、海軍海洋研究所
198. 李根寛、1991 「李忠武公時代の軍刑法についての試論的考察」『許善道教授華甲記念忠武公李舜臣研究論叢』
199. 朴哲、1991 「スペイン宣教師が記録した壬辰倭乱」『許善道教授華甲記念忠武公李舜臣研究論叢』
200. 朴河成、1991 「軍政新教育のための価値教育的接近」『許善道教授華甲記念忠武公李舜臣研究論叢』
201. 方相鉉、1991 「朝鮮亀船の接木性研究(剣船と板屋船接木)」『慶熙史学』16・17
202. 梁銀容、1991 「全羅左水營の義僧水軍に関する研究」『全南文化財』3

203. 柳炳善、1991 「壬乱初の朝明関係」『許善道教授華甲記念忠武公李舜臣研究論叢』
204. 李根寬、1991 「李忠武公時代の軍刑法についての試論的考察」『趙成都教授華甲記念忠武公李舜臣研究論叢』、海軍士官学校博物館
205. 李敏雄、1991 「李忠武公全書の内容と歴史的価値」『趙成都教授華甲記念忠武公李舜臣研究論叢』、海軍士官学校博物館
206. 李貞一、1991 「壬乱と元均」『趙成都教授華甲記念忠武公李舜臣研究論叢』、海軍士官学校博物館
207. 張学根、1991 「講和論と決戦論が水運統制使交替に及ぼした影響」『許善道教授華甲記念忠武公李舜臣研究論叢』
208. 張賢道ほか、1991 「李忠武公海戦遺物の探查方案に関する小考」『許善道教授華甲記念忠武公李舜臣研究論叢』
209. 鄭夏明、1991 「朝鮮時代の碗口と震天雷」『陸士論文集』40、陸軍士官学校
210. 趙楨基、1991 「西厓柳成龍と忠武公李舜臣；柳成龍を中心に」『許善道教授華甲記念忠武公李舜臣研究論叢』
211. 中村質、1991 「壬辰倭乱関連の諸問題」『国際海洋カシンポジウム発表文集』、海洋研究所
212. 崔斗煥、1991 「鳴梁海戦とカンガンスウォレ」『許善道教授華甲記念忠武公李舜臣研究論叢』
213. 崔永禧、1991 「壬辰倭乱の再照明」『国史館論叢』30、国史編纂委員会
214. 崔孝軾、1991 「壬辰倭乱中慶州戦闘」『慶州史学』10、慶州史学会
215. 許善道、1991 「順天(昇州)倭橋城(新城里城)考—名称と解説の誤りを正す」『震檀学報』71・72、震檀学会
216. 許善道、1991 「壬辰倭乱の再照明」『国際海洋カシンポジウム発表文集』、海洋研究所
217. 金相助、1992 「“溪西野譚系”に表われた倭乱・胡乱に対する視角」『白鹿語文』9、済州大 国語教育科
218. 金錫禧、1992 「壬辰倭乱と清道地域の倡義活動」『釜山史学』23、釜山大史学科
219. 金恒洙、1992 「宣祖初年の新旧葛藤と政局動向」『国史館論叢』34、国史編纂委員会
220. 金泰俊、1992 「壬辰倭乱と韓日間の文化的対応」『アジア文化』8、翰林大
221. 李南姫、1992 「慶尚右道の義兵活動と実録記事」『慶南文化研究』14、慶尚大慶南文化研究所
222. 文叔子、1992 「誠菴古書博物館所蔵壬乱以前の分財記」『書誌学報』8
223. 朴性植、1992 「晋州城戦闘」『慶南文化研究』14、慶尚大慶南文化研究所
224. 安啓賢、1992 「韓国僧軍譜」『壬辰倭乱と仏教義僧軍』、経書院
225. 李樹健、1992 「月谷禹拝善の壬辰倭乱義兵活動—その『倡義遺録』を中心に」『民族文化論叢』13、嶺南大民族文化研究所
226. 李章熙、1992 「壬乱前後の韓国の社会動態」『アジア文化』8

227. 李章熙、1992 「壬辰倭乱義兵の性格分析」『韓国史論』22
228. 李亨求、1992 「ソウル南山北麓出土の萬曆癸未銘勝字銃筒考—附:京畿道廣州出土新製銃筒」『擇窩許善道先生停年記念韓国史学論叢』、一潮閣
229. 張学根、1992 「壬辰期間の史論に表われた宣祖の執権計画」『中齋張忠植博士華甲記念論叢』、論叢刊行委員会、ソウル
230. 鄭棟柱、1992 「晋州城戦闘と論介」『南冥学研究—壬辰倭乱と晋州城戦闘』7、慶尚大南冥学研究所
231. 趙浚来、1992 「明軍の出兵と壬辰戦局の推移」『韓国史論』22、国史編纂委員会
232. 趙浚来、1992 「壬辰倭乱と海上義兵」『擇窩許善道先生停年記念韓国史学論叢』
233. 中村質、1992 「秀吉政権と壬辰倭乱の特質」『アジア文化』8、翰林大アジア文化研究所
234. 崔韶子、1992 「壬辰倭禍と明朝」『アジア文化』8、翰林大アジア文化研究所
235. 崔永禧、1992 「壬辰倭乱研究のための提言」『アジア文化』8
236. 崔永禧、1992 「壬辰倭乱の最初の戦闘について」『韓国史学論叢』上
237. 海軍士官学校博物館 編、1992 「忠武公李舜臣遺蹟図譜」海軍士官学校博物館
238. 許善道ほか、1992 「壬辰倭乱の再照明」『韓国史論』22、国史編纂委員会
239. 姜秉植、1993 「壬乱期の李舜臣と元均に関する小考」『壬乱水軍活動研究論叢』、海軍士官学校博物館
240. 姜性文、1993 「首都ソウルの防衛に関する研究」『陸士論文集』45、陸軍士官学校
241. 姜性文、1993 「朝鮮時代の環刀の機能と製造に関する研究」『学芸誌』3、陸軍博物館
242. 姜永五、1993 「李舜臣の出戦拒否は抗命である」『壬乱水軍活動研究論叢』、海軍軍史研究室
243. 姜永五、1993 「壬乱の教訓を通じて見た朝鮮海軍の位相」『壬乱水軍活動研究論叢』、海軍軍史研究室
244. 姜永五、1993 「壬乱期朝・日の海軍戦略」『壬乱水軍活動研究論叢』、海軍士官学校博物館
245. 金裕成、1993 「名護屋城図の安宅船に関する考察」『壬乱水軍活動研究論叢』、海軍軍史研究室
246. 金一相、1993 「鳴梁海戦の戦術的考察」『壬乱水軍活動研究論叢』、海軍軍史研究室
247. 金在瑾、1993 「壬辰倭乱期の朝・日・明の軍船の特性」『壬乱水軍活動研究論叢』、海軍軍史研究室
248. 金鍾基、1993 「釜山浦海戦」『壬乱水軍活動研究論叢』、海軍軍史研究室
249. 金鍾洙、1993 「壬辰倭乱以後の朝鮮の対明・清関係」『壬乱水軍活動研究論叢』、海軍軍史研究室
250. 金泰雄、1993 「壬辰倭乱以後の朝鮮国家の再建」『壬乱水軍活動研究論叢』、海軍軍史研究室
251. 金時晃、1993 「鶴峯先生の招論文について」『鶴峯の学問と救国活動』、鶴峯金先生記念

事業会

252. 羅鐘宇、1993 「忠武公李舜臣提督の戦略戦術」『壬乱水軍活動研究論叢』、海軍軍史研究室
253. 閔徳植、1993 「丁酉再乱時に川上久国が描いた南原城図について」『宋甲浩教授停年退任記念論文集』
254. 朴珠、1993 「壬辰倭乱と旌表」『韓国伝統文化研究』8
255. 潘允洪、1993 「壬乱以降の備邊司の邊事措置と軍事政策の議政」『歴史学報』139、歴史学会
256. 孫寶基、1993 「壬辰倭乱時に日本に渡った金属活字印刷術」『古印刷文化』1、清州古印刷博物館
257. 孫承喆、1993 「朝鮮時代の交隣体制の分析とその問題点」『韓日関係史研究』1、韓日関係史学会
258. 劉善浩、1993 「李舜臣と魚泳譚」『壬乱水軍活動研究論叢』、海軍軍史研究室
259. 李敏昊、1993 「壬辰倭乱後の朝鮮の対日外交—交再開過程—」『壬乱水軍活動研究論叢』、海軍軍史研究室
260. 李佑成、1993 「豊臣秀吉政権と鶴峯先生の‘海搓録’」『鶴峯の学問と救国活動』、鶴峯金先生記念事業会
261. 李載浩、1993 「慶尚右道における鶴峯の討賊救国活動—特に官、義兵の領導と飢民救済活動の事功について」『鶴峯の学問と救国活動』、鶴峯金先生記念事業会
262. 張学根、1993 「宣祖の執権計略に表われた李舜臣・元均の評価」『壬乱水軍活動研究論叢』、海軍軍史研究室
263. 張学根、1993 「倭軍嚮道論に対する明・日の圧力と朝鮮の対応」『壬乱水軍活動研究論叢』、海軍軍史研究室
264. 張学根、1993 「壬乱期朝鮮朝廷の水軍に対する期待と運用策」『壬乱水軍活動研究論叢』、海軍軍史研究室
265. 張学根、1993 「壬辰初期の明軍来援と軍糧論議」『壬乱水軍活動研究論叢』、海軍軍史研究室
266. 張学根、1993 「忠武公李舜臣の下獄罪名、戦没状況、自殺論、殉国論に関する検討」『壬乱水軍活動研究論叢』、海軍軍史研究室
267. 張学根、1993 「忠武公李舜臣の下獄罪名、戦没状況、自殺論、殉国論に関する検討」『学芸誌』3、陸軍博物館
268. 鄭鎮述、1993 「全羅右水使李億祺と統制使李舜臣」『壬乱水軍活動研究論叢』、海軍軍史研究室
269. 鄭鎮述、1993 「閑山島海戦研究」『壬乱水軍活動研究論叢』、海軍軍史研究室
270. 趙潑来、1993 「壬辰倭乱と全羅左水營」『全羅左水營の歴史と文化』
271. 崔孝軾、1993 「丁酉再乱中蔚山血戦」『素軒南都泳博士古希記念歴史学論叢』

272. 金子相、1994 「尚義軍・昌義軍研究; 尚州壬乱文献を中心に」『尚州文化研究』4、尚州産業大尚州文化研究所
273. 朴哲暎、1994 「壬辰倭乱と火薬兵器」建国大 修士論文
274. 孫弘烈、1994 「壬辰倭乱と朝鮮の医学」『清大史林』6、清州大史学会
275. 宋正鉉、1994 「壬辰倭乱論—官軍と義兵の役割問題」『全南史学』8
276. 梁銀容、1994 「壬辰倭乱と湖南の仏教義僧軍」『韓国宗教』19
277. 鄭杜熙、1994 「李舜臣研究—壬辰年以降の戦略と丁酉再乱に関する再検討」『李基白古希記念韓国史学論叢』(下)、一潮閣
278. 趙潏来、1994 「壬乱初期の防禦実態と勤王義兵の蜂起」『蒼海朴炳国教授停年記念史学論叢』
279. 趙潏来、1994 「丁酉再乱と湖南義兵」『全南史学』8、全南大
280. 崔孝軾、1994 「壬乱期の慶州寺院の抗戦活動」『芝村金甲周教授華甲記念史学論叢』
281. 崔孝軾、1994 「壬辰倭乱中永川城奪還戦闘についての考察」『大丘史学』47
282. 姜性文、1995 「朝鮮時代の片箭に関する研究」『学芸誌』4、陸軍博物館
283. 康植、1995 「壬辰倭乱期の義兵活動と性格変化」『釜山史学』19、釜山大史学科
284. 金康植、1995 「壬辰倭乱期の義兵の性格」『釜山史学』17、釜山大史学科
285. 金文子、1995 「秀吉による朝鮮再侵略直前の日本側の動向について; 柳川調信の活動を中心に」『祥明史学』3・4合併号、祥明史学会
286. 金子相、1995 「尚州北川の壬乱戦蹟考察—関係文献を中心に」『尚州文化研究』5、尚州産業大尚州文化研究所
287. 李東根、1995 「壬辰倭乱と文化的対応」『冠岳語文研究』20、ソウル大 国語国文学科
288. 李相弼、1995 「壬乱倡義人脈小考; 『茅谿先生日記』を中心に」『慶南文化研究』17、慶尚大慶南文化研究所
289. 朴哲暎、1995 「壬辰倭乱期の朝鮮軍の火薬兵器に関する一考察」『軍史』30、国防軍史研究所
290. 朴哲暎、1995 「壬辰倭乱期における火薬兵器の導入と戦術の変化」『学芸誌』4、陸軍博物館
291. 梁銀容、1995 「丁酉再乱の石柱関戦闘と華嚴寺義僧軍」『伽山学報』4 伽山学会
292. 李敏昊、1995 「壬辰倭乱最初の回答兼刷還使の派遣」『東西史学』1
293. 李章熙、1995 「壬乱期中山城修築と堅壁清野について」『阜村申延姪澈教授停年退任記念史学論叢』、同刊行委員会
294. 李章熙ほか、1995 「倭軍撃退の戦略戦術」『韓国史』29、国史編纂委員会
295. 張学根、1995 「壬乱期宣祖の戦略思考と水軍の立場」『東西史学』1
296. 張学根、1995 「壬乱期宣祖の戦略思考と水軍の立場」『史学志』28
297. 鄭鎮述、1995 「壬乱期朝鮮水軍の武器体系」『学芸誌』4、陸軍士官学校陸軍博物館
298. 河泰奎、1995 「高敬命湖南義兵の性格と錦山戦闘の意義」『神学と社会』9、韓一神学大基

督教総合研究院

299. 洪性徳、1995 「壬辰倭乱直後の日本の対朝鮮講和交渉」『韓日関係史研究』3、韓日関係史学会
300. 金康植、1996 「忘憂堂郭再祐の義兵運動と政治的役割」『南冥学研究』5、慶星大南冥学研究所
301. 金康植、1996 「壬辰倭乱中の軍糧調達策と影響」『文化伝統論集』4、慶星大郷土文化研究所
302. 金泰俊、1996 「申適道の生涯と義兵活動」『退溪学』8、安東大学校退溪學研究所
303. 李志映、1996 「壬辰倭乱と対外関係」『東国歴史教育』4、東国歴史教育会
304. 李鉉淙、1996 「申位に対する修正的批判—弾琴臺戦闘を中心に」『東義史学』9・10合併号、東義大学校東義史学会
305. 朴哲暁、1996 「東アジア三国の武器製造と交流—15、16世紀を中心に」『学芸誌』5、陸軍博物館
306. 朴哲暁、1996 「壬辰倭乱期における朝日両国の武器体系に関する一考察」『韓日関係史研究』6、韓日関係史学会
307. 朴尚煥、1996 「壬辰倭乱と鄭湛將軍」『軍史』32、国防軍史研究所
308. 朴翼煥、1996 「壬乱時の第一次晋州城大捷における鶴峯と金時敏の功業」『アジア文化』12、翰林大アジア文化研究所
309. 沈勝求、1996 「壬辰倭乱中武科及第者の身分と特性」『韓国史研究』91
310. 魚敬善、1996 「壬辰倭乱と忠州戦闘」『郷土史と郷土文化』、韓国郷土史研究全国協議会
311. 柳在春、1996 「壬辰倭乱と忠壯公韓百祿研究」『江原文化史研究 創刊号』、江原郷土文化研究会
312. 李相薫、1996 「壬辰倭乱期の江原地域の抗戦と役割」『アジア文化』12、翰林大アジア文化研究所
313. 李樹健、1996 「忘憂堂郭再祐の義兵活動の社会経済的基盤」『南冥学研究』5、慶尚大南冥学研究所
314. 李章熙、1996 「壬辰倭乱期中屯田経営について」『東洋学』26、檀国大附設東洋学研究所
315. 趙浚来、1996 「丁酉再乱と順天倭橋城戦闘」『アジア文化』12、翰林大アジア文化研究所
316. 崔官、1996 「日本近世文学のもう一つの系譜」『日本学報』36、韓国日本学会
317. 崔斗煥、1996 「忠武公李舜臣の余暇善用—従政図ノリ研究」『海洋戦闘』95、海洋大学
318. 崔壹聖、1996 「忠武公李舜臣將軍」『重山鄭德基博士華甲記念韓国史学論叢』、刊行委員会
319. 崔孝弼、1996 「壬乱時慶州中心の朝・日講和交渉展開」『慶州史学』15、慶州史学会
320. 金鍾基、1997 「制海権の観点から見た李舜臣の海洋戦略」『海洋戦略』95、海軍大学
321. 金時晃、1997 「鶴峯金誠一先生の錦城録について」『韓国の哲学』25、慶北大退溪研究所

322. 羅鐘宇、1997 「壬辰・丁酉倭乱と全羅道精神」『東西史学』3、韓国東西史学会
323. 盧永九、1997 「宣祖代の紀效新書の普及と陣法論議」『軍史』34、国防軍史研究所
324. 朴尚煥、1997 「壬辰倭乱と鄭湛將軍」『竹堂李炫熙教授華甲記念韓国史学論叢』、刊行委員会
325. 朴翼煥、1997 「壬乱時第一次晋州城大捷の実相と実相と正しい民族史の教育方案」『晋州文化』14
326. 沈勝求、1997 「壬辰倭乱期の武科の運営実態と機能」『朝鮮時代史学報』1、朝鮮時代史学会
327. 李敏昊、1997 「壬辰倭乱と対日国交再開の序幕」『黄山李興鍾博士華甲記念史学論叢』
328. 鄭杜熙、1997 「李舜臣」『朝鮮時代人物再発見』、一潮閣
329. 趙浚来、1997 「乱中日記に見る壬辰倭乱期の社会相」『韓国史学史研究』、干松趙東杰先生停年記念論叢刊行委員会
330. 崔瑄、1997 「近世日本文学における壬辰倭乱と毛谷村六助」『日本語文学』3、韓国日本語文学会
331. 崔錫起、1997 「忘憂堂郭再祐の節義精神」『南冥学研究』6、慶尚大南冥学研究所
332. 崔海甲、1997 「忘憂堂郭再祐の生涯と思想」『晋州文化』14、晋州教育大附設晋州文化圏研究所
333. 崔考軾、1997 「壬乱初期の慶州義兵活動の研究」『慶州史学』16、慶州史学会
334. 韓明基、1997 「壬辰倭乱期における明軍参戦の社会・文化的影響」『軍史』35国防軍史研究所
335. 郭鎬濟、1998 「壬辰倭乱期の清州城戦闘の義兵将研究」『忠南史学』10、忠南史学会
336. 金甲童・田壽辺、1998 「壬辰倭乱と丙子胡乱」『主題別に見る韓国歴史』、ソギョン文化社
337. 金康植、1998 「壬辰倭乱期の慶尚右道の義兵運動基盤」『釜大史学』22、釜山大史学科
338. 金盛祐、1998 「壬辰倭乱以降の復旧事業の展開と両班層の動向」『韓国史学報』3・4、高麗史学会
339. 金駿錫、1998 「両乱期の国家再造問題」『韓国史研究』115、韓国史研究会
340. 羅鐘宇、1998 「朝鮮水軍の武器体系と戦術駆使」『壬辰倭乱と李舜臣將軍の戦略戦術』、戦争記念館
341. 盧永九、1998 「朝鮮増刊本‘紀效新書’の体制と内容—顯宗5年再刊行‘紀効新書’の兵学史的意味を中心に」『軍史』36、国防軍史研究所
342. 朴哲暁、1998 「壬辰倭乱は勝った戦争か、敗れた戦争か」『韓国と日本、歪曲とコンプレックスの歴史』、韓日関係史学会、白樺
343. 方相鉉、1998 「李忠武公の丁酉再乱小考」『史学研究』55・56合併号
344. 北島万次、1998 「壬辰倭乱と晋州城戦闘」『南冥学研究』7、慶尚大南冥学研究所
345. 北島万次、1998 「壬辰倭乱と李舜臣」『南冥学研究』8、慶尚大南冥学研究所
346. 北島万次、1998 「朝鮮水軍の連勝と日本軍の対応戦術」『壬辰倭乱と李舜臣將軍の戦略

戦術』、戦争記念館

347. 徐台源、1998 「壬辰倭乱および孝宗の北伐論が内政に及ぼした影響」『国史館論叢』80、国史編纂委員会
348. 安国承、1998 「壬乱義兵将鄭文学研究」『京畿郷土史学』3、全国文化院連合会京畿道支会
349. 李採衍、1998 「韓・日実記文学に表われた壬辰倭乱体験の形象化戦略」『韓国文学論叢』22、韓国文学会
350. 鄭東鎰、1998 「高陽地域におけるその他の戦闘と義兵活動」『京畿郷土史学』3
351. 鄭成一、1998 「朝鮮陶工の後裔、ト刊と李参平」『韓国と日本、歪曲とコンプレックスの歴史』韓日関係史学会
352. 趙浚来、1998 「壬辰倭乱と綾州義兵」『綾州牧の歴史と文化』、木浦大学校博物館、和順郡
353. 村井章介、1998 「壬辰倭乱の歴史的前提—日朝関係史を中心に」『南冥学研究』7、慶尚大南冥学研究所
354. 崔瑄、1998 「日本文学に表われた壬辰倭乱の影響」『南冥学研究』7、慶尚大南冥学研究所
355. 崔瑄、1998 「日本近世文学の中の李舜臣将軍」『別巻比較文学』98、韓国比較文学会
356. 崔斗煥、1998 「忠武公李舜臣の陣法運用と信号体系」『壬辰倭乱と李舜臣将軍の戦略戦術』、戦争記念館
357. 崔永禧、1998 「壬辰倭乱に対するいくつかの意見」『南冥学研究』7、慶尚大南冥学研究所
358. 崔永禧、1998 「忠武公李舜臣の生涯」『壬辰倭乱と李舜臣将軍の戦略戦術』、戦争記念館
359. 河宇鳳、1998 「日本に朱子学を伝えた朝鮮人捕虜姜沆」『韓国と日本、歪曲とコンプレックスの歴史』上、韓日関係史学会、白樺
360. 韓明基、1998 「丁酉再乱期の明水軍の参戦と朝明連合軍」『壬辰倭乱と李舜臣将軍の戦略戦術』、戦争記念館
361. 姜性文、1999 「幸州大捷における権慄の戦略と戦術」『壬辰倭乱と権慄将軍』、戦争記念館
362. 金文子、1999 「壬辰倭乱に対する日本の視角の変遷」『歴史批評』46、歴史批評社
363. 金昊鍾、1999 「壬乱時の唐橋倭賊と嶺南北部地方の郷兵の抗争」『歴史教育論集』23・24 合併号、歴史教育学会
364. 朴哲暁、1999 「壬乱初期戦闘における官軍の活動と権慄」『壬辰倭乱と権慄将軍』、戦争記念館
365. 朴昌基、1999 「壬辰倭乱関連の日本軍記文学研究」、高麗大学校博士論文
366. 宋亮燮、1999 「壬辰倭乱期における国家の屯田設置と経営」『韓国史学報』7、高麗史学会
367. 沈勝求、1999 「壬辰倭乱期軍事指揮権の推移と性格」『壬辰倭乱と権慄将軍』、戦争記念館

368. 吳宗祿、1999 「壬辰倭乱—丙子胡乱期の軍事史研究の現況と課題」『軍史』39、国防軍史研究所
369. 李乃沃、1999 「戦争を通じた文化交流」『改めて見直す壬辰倭乱』、晋州博物館
370. 李相薫、1999 「都元帥権慄の戦略構想と活動」『壬辰倭乱と権慄將軍』、戦争記念館
371. 李章熙、1999 「都元帥権慄論」『壬辰倭乱と権慄將軍』、戦争記念館
372. 村井章介、1999 「島津史料から見た泗川戦闘」『南冥学研究』8、慶尚大南冥学研究所
373. 崔瑄、1999 「木曾の文学化」『日本文学研究』創刊号、韓国日本文学会
374. 崔瑄、1999 「天竺徳兵衛物に関する考察」『日語日文学』11、大韓日語日文学会
375. 河泰奎、1999 「丁酉再乱期全羅道地方の義兵活動について—全羅道北部地方の義兵活動を中心に」『韓日関係史研究』10、韓日関係史学会
376. 韓明基、1999 「壬辰倭乱時期の‘再造之恩’の形成とその意味」『東洋学』29、檀国大東洋学研究所
377. 金祥起、2000 「壬辰倭乱期権慄の梨峙大捷」『忠南史学』12、忠南史学会
378. 李錫麟、2000 「壬辰倭乱期清州城戦闘と義兵活動」『忠北史学』11・12合併号、忠北大学校史学会
379. 趙浚来、2000 「壬辰倭乱史研究の推移と課題」『朝鮮後期研究の現況と課題』、創作と批評社
380. 崔瑄、2000 「‘三韓の王は日本の犬だ’について」『日本語文学』8、韓国日本語文学会
381. 韓明基、2000 「壬辰倭乱期明の内政干渉と直轄統治論」『東アジア歴史の還流』、知識産業社
382. 朴哲暁、2001 「壬辰倭乱期日本軍の占領政策と影響」『軍史』44、国防部軍史編纂研究所
383. 金時徳、2002 「『太閤記』と『絵本太閤記』の比較研究—壬辰倭乱関連記事を中心に」高麗大学校修士論文
384. 朴哲暁、2002 「15—16世紀の朝鮮の火器発達」『学芸志』9、陸軍博物館
385. 朴哲暁、2002 「壬辰倭乱期望菴邊以中の軍事活動」『壬辰倭乱期における望菴邊以中の活動と思想』、ボンナム書院
386. 朴哲暁、2002 「壬辰倭乱期日本軍の漢城占領と蘆原坪戦闘」『人文社会科学論文集』31、光云人文社会科学研究所
387. 朴哲暁、2002 「丁酉再乱期朝明水軍の連合作戦と露梁海戦」『忠武公露梁海戦勝捷祭学術発表』、南海郡
388. 李敏雄、2002 「丁酉再乱期漆川梁海戦の背景と元均艦隊の敗戦経緯」『韓国文化』29、ソウル大韓国文化研究所
389. 李敏雄、2002 「鳴梁海戦の経過と主要争点の考察」『軍史』47、国防部、軍史編纂研究所
390. 金時徳、2003 「『太閤記』の壬辰倭乱記事に関する考察」『日本学報』56、韓国日本学会
391. 李敏雄、2003 「朝・明連合艦隊の形成と露梁海戦の経過」『歴史学報』178、歴史学会
392. 崔瑄、2003 「芥川龍之介と『壬辰録』」『比較文学』30、韓国比較文学会

393. 金時徳、2004 「江戸後期読本の叙述様相について—尚州、忠州戦闘記事の分析を中心に」『韓日軍事文化研究』2集、韓日軍事文化学会